

と雄田鷹は右兵衛督となつて従四位下に昇り、任所に赴かない武藏守に任ぜられたので、河内國から引上げて都住居をするやうになつた。しかし由義宮御造營には全然關係が絶えた譯でなく、その以前に任ぜられた内匠頭として高所から指圖を續けてゐたが、十一月には更に進んで中務省の大輔の役を仰附つた。異數の出世であると云はなければならなかつた。

「法王は家柄の人がお好きだし、それにあの人はお氣に入りだ。法王に取入ることの上手な人が推舉せられて出世して行くんで、才能が勝れてゐても、忠誠の念が厚くとも、何の役にも立たないんだ」

それが一般的の世評であつたし、殊に皮肉家の路真人豊永は然う云つて、聲高く詩作の教へを受けに来る門人に語る有様だつた。それと云ふのが、地方出身の者は和氣清鷹を初め大抵の人の職分が進まなかつたからである。

聖上の法均尼への御覺えはいよく、目出度く、御信任を賜つて、従四位下に昇り、進守大夫の稱號を授け給うた。宮中に奉仕する尼の身分として、此上もない光榮であつた。清鷹は家門の面目として姉に祝ひ言葉を述べ、いや更に姉への恭敬の念を昂めてゐた。

かうした二年も過ぎて神護景雲三年となつた青葉の頃、早朝難波津で船を捨てた太宰主神中

臣習宜阿曾鷹は、寧樂の都への街道を、従者に宇佐八幡宮の御託宣を、繩を張つた唐櫃に納めたのを擔がせたのを奉じ、外に従者二人を従へて歩いてゐた。二年以前に従者一人を伴うて都に上つて來た時とは、すっかり容子が違つて意氣の軒昂たるものがあつた。摺れ違ふ佛信心の行人が、兎もすれば白衣の神官と見て、輕しめるやうな眼色を見せると、それを睨め回すやうな威勢さへ示し、然うして行人が知らずして唐櫃へ近寄つたりすると、

「側へ寄れ、唐櫃に立て、ある文字が讀めぬのか」

怒鳴りつけもした。唐櫃には、

「宇佐八幡宮」と書かれた白木の札が立てゐた。

阿曾鷹は日永の一日を歩き續けて都近くなると、従者の一人を先に中務省に走らして、

「太宰主神中臣習宜阿曾鷹、宇佐八幡宮の御託宣を奉じて、朝廷へ参向つかまつつた」と、述べさせた。

宇佐八幡宮の御託宣を奉じて、太宰主神が來たと云ふことは、然うした事柄を先づ以て受附ける中務省としては、重大事件であつた。早速阿曾鷹の従者から申告を受けた少録より、順次に上官に傳つて行くやうにしたが、取り敢へずの處置として、大録の藤原良鷹に少録一人を従

へさし、外に中務省の雜人達も交へて、都の入口に阿曾鷹を迎へさせた。
「遠路お苦勞で御座つた」

太宰主神の一行が都の入口へ來ると、大録の藤原良鷹の方から歩み寄つて、阿曾鷹にねぎらひの言葉を述べた。

「お出迎へ大儀でお座ります」

阿曾鷹は中務省からの出迎へがあつたのに満足して、如何にも心地快い顔色を見せてゐた。然うして骨組の頑丈な大きな身體を、前に立つて導く大録藤原良鷹の後から、のそり／＼歩いて、唐櫃守護の嚴かめし容體を取繕つてゐた。當時の都としては中務省の役人が神官の先に立つて市中を導くなどと云ふことは、神社で行はれる祭禮の際は別として、極めて稀なので、それと眼にした都人は吃驚りして佇立つて見送つてゐた。

中務省では阿曾鷹一行を、かうした場合に使用する中務省附屬の宮闕外の迎館に迎へ入れて、唐櫃は其處の奉安所に奉安せられたが、直ぐ御神託警衛の兵士が配置せられた。その日は旅の勞れもあるであらうと阿曾鷹に對しては、單に少録の一人が迎館に出張して阿曾鷹を饗應するにとどめたが、従者達も然うした饗應に別室で有附いたのであつた。然うして翌朝になつて阿

曾鷹が御託宣を納め奉つた唐櫃を奉じて中務省へ向ふ時は、昨日よりも待遇は可重になつて、大録の藤原良鷹の上役の少輔の橘比良鷹が、良鷹と共に先導に立つたばかりか、前夜來からの兵士に人數を加へて、一行の前後には警衛の兵士が附隨したのである。

御神託に就ては古來から、日本國を守護し給ふ御神意の顯示として、深く恐れられ、崇められて、朝廷では受納し迎へ奉られてゐるのである。近く聖武天皇の御代天平勝寶元年十一月には宇佐八幡の御神託に依つて、宇佐八幡の禰宜尼大神杜女、主神司大神田鷹が御神體を奉じて都へ上つた時は、石川年足を迎神使として兵士を率ひて前後を警衛せしめられ、平群郡で朝廷の諸官に迎へられて京に入り、宮南の梨原宮に造られた新殿に御神體は奉安せられたのであつたが、杜女が紫色の輿に乗つて東大寺を拜した日には、天皇も太上天皇、太后と共に行幸啓あらせられ、その日に大神に一品、比咩神に二品の神位を奉られたのである。その時の宣命は、「宇佐八幡は曾て天神地祇を率ゐて、造佛の擧を助けてやると宣はれたが、今回その効果が顯はれて、東大寺の造營を完了することが出來た」

とあつたのである。

然うした次第もあつて、朝廷では殊に宇佐八幡の御神託に、重きを置かせ居給ふたのであつ

た。

二

中務省へ参進した御神託を奉じた阿曾鷹を、中務省の主宰者であつて参議でもある栗田道鷹は、大輔である藤原雄田鷹を従へて、中務省の建物の外に立つて出迎へた。正しく阿曾鷹に取つては一世一代の榮えで、威嚴は取繕つてゐたが、得意の絶頂にある心地が、ともすれば微笑を唇邊に漂はせやうとするのであつた。それと云ふのが中務省では普通地方の主神が用向きを持つて訪殿した場合、少輔か大録が應接してくれるのが關の山で、大輔となると容易に逢つてくれず、況して主宰者の栗田道鷹などには滅多に逢へ得なかつたからである。

栗田道鷹が恭しく阿曾鷹に禮をしたのに、神託使らしい尊嚴を示して禮を回してから、道鷹と雄田鷹に導かれて、阿曾鷹は客殿へ昇つて行つた。唐櫃は客殿階下で今朝の役を務める爲に精進潔齋した少録二人の手に移されたのである。然うして唐櫃と阿曾鷹は上座に、栗田道鷹と藤原雄田鷹、それに神託使一行の先導役を奉仕して來た少輔の橋比良鷹が加つて遙か下手に座

して頭を下げた。御神託を傳へるに當つて、阿曾鷹は先づ以て唐櫃の上に置かれてあつた御幣の附いた神を取上げ、下手に平伏してゐる三人へと嚴に修祓式を行つた。

御神託が如何なるお言葉を盛つてゐたか、如何なる御趣旨が傳へられたのであるか、一時神聖な場所となつた客殿から遠ざけられた中務省の役人達は知る由もなかつたが、聽て使命を果した阿曾鷹が空となつた唐櫃を従者に擔はせて、悠々として迎館へ引取つて行くのを、客殿の中に立つて見送る栗田道鷹の顔は土氣色をしてゐたし、階段下で見送る少輔の橋比良鷹はがたがた慄へてゐるやうに見られたので、御神託は非常に重大なものであつたと、中務省の役人達は以心傳心に悟つたのである。然うして其等の役人達は、階段の中段で見送る雄田鷹のみが平生通りの容貌をして、格別心を動搖した容子が無いのを合せ眼に入れたのである。

阿曾鷹が歸り去つて了ふと、道鷹と雄田鷹と比良鷹は客殿に鼎座して、何事か協議するやうに見えたが、聽て道鷹は三寶臺の上に置かれた御神託を自ら捧持し、背後に雄田鷹と比良鷹を従へて客殿を下つて、近くの内閣の殿堂の方へ進んで往つた。

内閣の殿堂には、法王太政大臣弓削道鏡、藤原永手左大臣、吉備眞備右大臣、その他大納言、中納言、参議、非参議と總ての内閣員は、弓削道鏡法王を上座に、左右に居並んで参集して、

託宣使から中務省の方へ渡御になつた宇佐八幡宮の御神託が、程なく内閣の方へ捧持されて來るのを待受けてゐた。其處へ栗田道麿は御神託を捧持して昇殿して來たが、雄田麿と比良麿は階段下に止つてゐて、道麿の昇殿を見届けると、中務省の方へ歸つて往つた。

道麿は神託を捧持して道鏡法王の前迄進むと、法王を初め左右大臣其他の内閣員一同は、御神託に敬意を表して頭を下げた。道麿は御神託を載せた三寶臺を下に置くと、跪いて恭しく御神託を拜禮したが、直ぐ御神託を手にして立上り、威嚴ある容體で、恐懼して頭を下げてゐる内閣員一同を盼みまはしてから、莊重な音調で讀上げた。

弓削道鏡を帝の位に登らしめたならば、天下は必ず太平とならう。

殿内は寂として咳一つするものもなく、神聖な氣分の漂ふ中に、道麿の聲のみが朗々として響いた。道麿は捧讀し果てると御神託を以前の通り三寶臺の上へと回し、もう頭を上げてゐた道鏡法王に一禮してから、參議である自分の席へと就いた。左右大臣初め他の内閣員にしても既に頭を上げてゐたが、餘りとは事の重大なるに驚愕してゐる色を見せて、何人も言を發せず、道鏡法王の方へ瞳を向けてゐるのみであつた。

道鏡法王の顔には初め些つと得意の色が顯はれたが、然うした心地を他人に窺はしめるのを

恐れてか、急いで眉と眉との間に如何にも困惑したかのやうな、立皺を二本刻み込んだ表情に變へて了つた。永手左大臣は例の如く無表情な容貌附で、眼をバチクリしてゐたし、眞備右大臣は屹と唇を引緊めて、他の内閣員同様道鏡法王の容子を瞞まもつてゐる限りだつた。然うした沈黙がいつ迄も續くので、とうとう道鏡法王大政大臣は口を開いた。

「御神託に顯はれた御趣旨は、國家の重大事であつて、私としては恐懼おく能はざるものがあります。しかし御神託は神聖なものであつて、内閣で審議す可きものではありません。上奏を仰いで一重に聖鑒を垂れさせ給ふばかりです」

道鏡法王が發言したのに、内閣員一同は頷いた。直ぐ法王は言葉をついで、

「只今諸卿と共に拜承した御神託は、私の一身上と關聯して居りますから、太政大臣であつても、私は避けたいと思ひます。永手左大臣卿から上奏あられんことを望みます」

道鏡法王は落着いた聲で云つたが、格別永手左大臣に強ひやうとする容子はなく、寧ろ謙遜な自身の思ひの程を、諸員に示さうとするらしく感じられた。耳朵はほんのりと紅く、眼は生と輝いてゐた。

「御神託を法王太政大臣を差措いて、私が上奏し奉るのは、職分を亂す恐れがあるやうに考へ

られます。やはり太政大臣たる御役目として、よしんばお身上に關係がおありになつても、太政大臣自ら御神託は上奏し奉るのが、然る可きであらうと存ぜられます」

永手左大臣は少し吃り氣味ではあつたが、躊躇なく意嚮を述べた。

「私も永手卿と同様な意見で御座います。太政大臣のお心地は能く解りまするが、太政大臣を差措いて、他の内閣員にて、今日の御神託を上奏し奉るのは、職分を亂す恐れがあつて、恐懼の至りです。太政大臣自ら陛下の在はす法華寺へ御參内あつて、上奏し奉るのが順當であると存ぜられます」

吉備眞備右大臣は赭顔の額に汗を湧かしてゐた。それを聴くと道鏡法王太政大臣は、重ねて異議を云はず、然うした言葉を納れた領きを見せて、

「それでは、太政大臣から御神託は上奏し奉ります。只今から私は法華寺へ參内致します」

法王道鏡太政大臣が直ぐ立上つて法華寺へ參内するのを、見送る内閣員一同の眼は、異様な光りを漂へ、參議の中の三人程は、怒りに燃えてゐるやうに眉を上げてゐたが、依然として沈黙は續き、御神託の御趣旨を批評する者も、身を動かして立上らうとする者もなかつた。魂を全く打ちひしがれ果てた者のみが洩らす溜息が、其處此處に微に聞かれ、期せずして哀みの音

樂を聞入つて、それを心で味つてゐるやうな憂鬱な氣分が堂内に瀰漫して來た。

すると突然彼方の一隅で吸り泣きの聲を擧げた者があつた。内閣員が揃つて會議を初めてゐる時などに、飲み湯を運んで來たりする給仕役の年若い雜人なので、その雜人は誰も去れいと云ふ者がなかつたまゝ、道麿が神託を捧讀した際、自身の居場所の几帳の蔭に座して聞いてゐたのである。

吸り泣く雜人は、自身の居場所の几帳の蔭から身體をハミ出してゐたので、内閣員一同は些つと眼を轉すると、直ぐ眼にせられた。永手は其方へ瞳を向けて凝視したが、黙言つてゐた。

吉備眞備も同じやうに其方へ視線を向けたが、やはり黙言つてゐた。栗田麿も見たが黙言つてゐた。大納言、中納言、參議と、一樣に眼にしたのであるが、黙言つてゐた。しかしさうして黙言つてゐるのは、無關心であるのではなく、また雜人の吸り泣き故に沈黙の侮蔑をしてゐるのではなかつた。内閣員一同の心には強く／＼響いて、自分自身がその泣き聲と一所に、泣いてゐるやうに感ずるのであつた。參議の席に道鏡法王の弟の氣弱者の弓削淨人が座してゐたが、堪へ兼ねたらしくつと立上つて、狐鼠々と立去つて行くのに心附いて、一同の視線は其方へと轉じたが、それでも黙言つてゐた。憂ひと驚きが一同の舌の根を縮めて了つたらしい。一人

位は決然として立上つて忠誠の意見を吐く者が、あつてよささうであるのに一人もなかつた。道鏡法王の權威を恐れる思ひが、正しさを正しさに批判する心を蝕んで了つたのである。

動搖の日

一

和氣清鷹は阿曾鷹が宇佐八幡宮の神託を奉じて都入したのを、其の日の中に知つてゐた。然うして翌朝いつもの如く近衛府へ出仕した時に、今朝は朝堂に於て勅命に依て内閣員一同で御神託を拜承する次第を聞いた。御神託は畏き極みのものであるが、最近は軽々しい事柄に迄も御神託があつて、前朝廷時代に重ぜられたのとは、幾分趣きを異にして來てゐるので、今度の御神託にしても、世を驚かすやうなことは萬が一にもなからうと、軽い心地で聞いてゐたのである。それが圖からずも上官たる近衛少將が、内閣の一員から洩らされたと云つて、午過ぎに外出先から歸つて來て清鷹の耳に入れた御神託に、清鷹は身體が戰慄く程驚いたのであつた。

御神託にしても、あるまじきことでないやうに考へられた。それが確かであるか、否かと、上官の近衛少將に更に一度問回へしたが、

「間違ひのない、確かなことです」

と、憂色を頬に漂はして答へるのであつた。その近衛少將は滅多に偽りを云つたり、曖昧な事柄を口外しない人格者であるので、然うと信せずには居られなかつた。それでも猶疑ひの心があつた。

「日本の皇室を守護り、國土の安穩を守護り給ふ宇佐八幡宮が、然うした御神託を行はせらるるとは」

清鷹の皇室を尊崇し、國家の安穩を希願ふ忠誠の心には、何としても信ぜられぬことのやうに思はれてならないのであつた。もうその頃には清鷹の役所にゐる何人も、何處からか御神託の次第を聽込んで來てゐて、それは間違ひのない事實であると知られた。

清鷹は直ぐ思ひを中務大輔である雄田鷹に走せた。

「雄田鷹殿は御神託使阿曾鷹の齋らした御神託を、栗田道鷹卿と共に眞先きに拜承したのであるから、定めて驚いたであらうし、とう／＼來る可きものが來たと思つたことであらう。恐ら

く自分へ何か云つて来るに違無い」

次で吉備右大臣へ思ひが向けられたが、二年以前釋奠の日に當つて、右大臣が自分へ語つた言葉が順次に想起され。

「右大臣の忠誠の一念は、必ずや御神託であつても阻止せらるゝ手段を取られるに違無からう」
續いて姉法均尼へと思ひを回らした。

「忠誠の一念に凝り固つてゐる姉の法均尼は御神託を耳に入れて、屹度驚き周章でもしたらうし、嘆きもし、悲哀みもしたであらう。然うして同役の明基尼や由利女と、どんな話を交してゐるであらう」

と想像を逞うしてあれこれと、考へて近衛府にゐても氣が氣ではなかつた。

近衛將監の役目として、清鷹は一日の中一度は、各宮闕の門を守護してゐる番長に率ひられる兵士達の勤務振りを見廻らねばならなかつた。聖上の在します法華寺には守護の兵が派出されてあるので、其方へも巡回せねばならなかつた。法華寺は寺院であるので、大仰な守護を厭はせ給ふ大御心を奉じて、目立たぬやうに要所々々を兵士達は堅めてゐるのであつて、事實は當然法華寺の方がすつと守護の兵数は多かつた。

正午を一刻程過ぎた頃、清鷹は自己の巡視番となつたので近衛府を出て巡視に出懸けた。宮闕内の白砂の上を歩いてゐると青葉の薫風が憂鬱な思ひの頬を吹いて、些つと清々しい氣分がしたが、それは咽喉が渴いた時に泥水を見た程の快さで、直ぐもとの重々しい心に回つて了つた。空は稍曇り氣味で薄日が映してゐた中を、道順として先づ宜陽門の方へ歩を進めたが、今しも内閣のある殿堂の方から、參議の藤原宿奈鷹が左大臣藤原永手と連立つて、家路へ就くらしく退廳して来る姿に遭遇した。宿奈鷹は良繼と稱し、雄田鷹の兄であつた。永手左大臣にしても、宿奈鷹にしても一目見て、心に憂ひを抱いてゐる態が容貌に顯はれてゐた。

清鷹は停止つて二人に敬禮した。と、永手も宿奈鷹も禮を回したが、宿奈鷹は足を停止めて、

「清鷹殿、御神託の次第はお耳に這入つて居りますか」

「はい、洩れ承はりました御座ります」

「ふむ、道鏡法王は御自身で御神託を上奏し奉らずに、清鷹殿の姉法均尼殿に御神託を上奏し奉るやうに取圖はれ、既に聖聞に達したと、先刻内閣の方へ情報が達しました」

「はあ、姉法均尼が上奏し奉りましたので御座りまするか、誠に畏れ多い次第だと存じ奉ります」

「法均尼殿は以前の佛舍利出現の際には、眞先きに御信仰になつたのを、私は承知して居りま

す。今度のことと云ひ、重ね／＼の重いお役目、お逢ひの節は私が宜しく申して居たとお傳へ下され」

然う云ふと良繼は清麿と禮を交はして、彼方へと先に進んだ永手左大臣に追附く可く足早に去つて往つた。

今更めかしく宿奈麿が佛舍利を持出したのが、清麿には氣懸りであつた。或は宿奈麿は弟の雄田麿から佛舍利が贖物であるのを聞き知つてゐて、今度の御神託と緬ひ交せて、それとはなしに嫌味を述べたのではなからうかと思附かれた。しかしそんなことを考へるよりも、姉法均尼が御神託を畏れ多くも上奏し奉つと云ふことは、清麿に取つては眞に霹靂の一聲であつた。道鏡法王が高壓的に命じたのか、それとも懇談せられて、然うした大役を執行せねばならないやうになつたのか、いづれにせよ、聖上の御座近くに待る側近の尼女官として、誠に畏れ多い次第であると、清麿は胸を轟かして思はざるを得なかつた。直ぐ姉の許へ走せつけて心境を聴きたくてならなかつたが、役目があるので然うはなりかねた。

再び足を舉げて進んで行くと、右大臣吉備眞備と栗田道麿とが、前後して退出して來るのに遭遇つた。吉備眞備は清麿を深い思ひの籠つた眼で凝視したが、屹と口元を引緊めたまゝ、清

麿が禮をするのに禮を回へして行過ぎて了つた。清麿は栗田道麿が中務省主宰者として今朝の中臣習宜阿曾麿の御神託に重大な役を務めたのを聞知つてゐるので、近寄つて面と面とを合すと、

「今朝の御役目、嘸かしてお骨の折れましたことでお座りませう。無事御役目をお果しなされましたのをお祝ひ致します」

町重に挨拶した。

「何の／＼私の役目よりも、御姉上法均殿の方が今日重いお役目をお務めになりました。お姉上には嘸かし何かと御辛勞の多いことだとお察し致します」

道麿は清麿に姉法均尼が重いお役を務めたのを、心から感謝してゐるらしい心地を言葉に見せて行過ぎて了つた。道麿と清麿とが話してゐる時、吉備眞備は回顧つて、其方へ向けた清麿の眼と合ひ、何か云ひたげさうに唇を動かしかけたが、それなりでぐるり背を向けて歩みを續けるのであつた。

「永手左大臣、吉備右大臣を初め、他の内閣の方々も心配しておいでになつてゐるのは、容子で解つてゐる。悦んでゐらるゝのは道鏡法王丈けであらう。然うしてこれが此後何う云ふ態な

結果を齎すのであらう。御神託であつて見れば、直接道鏡法王が動いた譯ではないにしても、神の御聲を人の口を通じて他の人の耳に入れる御神託であつて見れば、御神託を疑つては相濟まないが、何か其處に因縁のまつはるやうなことがなからうかしら、太宰主神中臣習宜阿曾麿と、道鏡法王との間に繋つてゐる糸はなからうか、それとも基眞禪師が置せ佛舍利を眞物として献上して、官位に有りついたやうな忌はしい隠謀が潜つてゐるのではなからうかしら」

清麿の鋭くなつて來てゐる神経は然うしたこと迄考へ及ぼされるのであつた。

彼方に雄田麿が中務大輔として務めてゐる中務省の殿堂が、清麿の眼に入つた。役目中にはあるが、ほんの少しの時間を雄田麿に逢つて話したい思ひに驅られて、或はもう退廳時間に近いので、中務省から早引きに退出して來やしないかしらと、些つと足を停止めたがそんな氣配は見られなかつた。止むを得ず更に足を上げて、務めを果す可く宮門の守護の巡視に向つた。

二

宮門の巡視を終ると 聖上の在^まします法華寺警護の巡視に赴いた。法華寺の門を守護る番長

や兵士を一應點検してから境内へ這入つたが、平生の閑寂さを保つて、少しも變つた容子は見られなかつた。高い松の梢は微風に松籟の琴を奏でゝゐたし、低い立樹にはいつものやうに小鳥が群り囀つてゐた。御座所の邊りは、此の時刻になつて來て晴渡つた空から置はしく日がさしてゐて、聖壽をことほぎまゐらすやうに眺められた。裏門の方へ往つて、其處でも務めを果したが、近衛府に歸る途中にまだ二ヶ所巡視せねばならなかつた。それにもかゝはらず折角法華寺迄來たのであるから、姉法均尼に逢ひたいと思ひが湧き上つて來て、もう何としても壓へ得られなかつた。

近衛府に歸るに遅れないやう、歸途の巡視に遅れないやうにと、しかと心を定めて、姉達女官を訪問する際には何人も潜る小門を通つて、女官訪問者を取扱ふ老尼の役人の前に立つた。老尼は清麿を知り抜いてゐるので、直ぐ法均尼の部屋附きの婢は喚ばれて、清麿は姉の房へ通つたが、婢の口から、

「今日は兎てもお忙しさうで、御休息の時間にもお下りになりませんでした」

と聞かされた。それでも進守大夫様にお越しの程を通じませうと婢は云つてくれて、進守大夫法均尼へ傳達せらるゝやう手続きを取つてくれた。然うして清麿は婢の勧めでくれる白湯に

口を露して待つてゐると、聽てのこと、婢は傳達してくれた人からの口上として、

「今日は忙しいから、とても逢へない」

との法均尼の言葉を齎して來た。詮方がないので清麿は婢に雜作をかけた謝辭を述べ、姉の房を辭した。

遇へないのは残念であつたが、それでも幾分心遣りにはなつた。姉が忙しいのは當然であつて、それ丈けに姉は忠誠の一念を盡して御奉公申上げてゐるその心の一端に、觸れたやうな思ひがしたからであつた。

法華寺の門を辭するに當つて清麿は、御座所の方へ向つて、大御心の安らげくお在はしますことを願つて禮拜した。然うして猶も残る務めを果す可く足を上げた。

その夕べ清麿は家へ歸ると、妻の嗣子も御神託の次第を家來の者が何處かで聞いて來たのを告げしらされて知つてゐた。

「いつもお話になつて批難しておいで遊ばした、大學寮の堯舜の御代變りの學説を、日本國へ實行して見たらいゝとの御神託で、誠に恐れ多いことの次第だと、女の私にも考へられます」
嗣子は良人の憂色に滿ちた顔色を窺ひながら、自己の感想を述べた。

「道鏡法王は斷じて舜ではない。よしや舜の徳を備へておいでになつても、肇國より皇統連綿として彌榮える日本國には、然うしたことがあつてよいものか。私には御神託であつても判らない。嗣子今度の御神託を道鏡法王の命令か、それとも御依頼かで姉上が上奏し奉られたのである。姉上は日本の國體の如何なるものであるかを能く御承知になつてゐる。嗚かしお心勞であつたらうと思ふ」

「然うで御座りましたか、承はるのが今が初めて。義姉上様は然うした重いお役をお務めになつて、お氣苦勞なされたことであらうと察せられます。どうぞお身體に障らねばよいがとお思ひも致します」

「姉上はいつも私に國難に臨んでは、一死奉公せよと仰せらるゝ。御自身にしてもそのお覺悟を持つておいでになるのであるから、今かうした異變が起つて來た場合、御自身がその中に捲込まれてお出でになつても、心を引締めて、心勞に負けて身體を損ねるやうなお方ではない。藤野の姓を持つ和氣の家では、御先祖から男も女も、難儀なことに遭遇ふ毎に、それに打勝つて行くのが掟となつてゐる。其方も他家から我家へ縁附いて來た以上、その心構へを持つて貰はねばならない」

「はい。それは能う心得て居ります。お氣遣ひのないやうにお願いいたします」

嗣子は決然として答へるのであつた。

「ふむ。子供達は」

「今朝程申上げましたが、私の祖母の誕生日で、里方へ三人共に招かれて参りました。夕飯の饗應を受けてから歸つて参ります」

「お、然うであつたな。今朝からの氣苦勞ですつかり忘れて了つてゐた。それでは其方と二人で夕食を取らう」

清鷹と嗣子は婢達の給仕で、それから陸じく夕食の膳に向つたのである。

三

翌日清鷹が近衛府へ出仕した頃には、都に住む程の朝廷に仕ふる者は、一人残らず御神託の次第を聞き知つてゐた。然うして御神託を奏上し奉るに當つて、流石に道鏡法王にしても遠慮してか、それとも外に考へがあつてか、進守大夫法均尼に奏上し奉らしめたと云ふやうなこと

なども、九重の雲深うして容易に窺ひ知り得ないのにも關はらず、傳へ聞知つてゐた。それをひそ／＼と内密話にして囁いてゐる者もあつたし、聲高に論議してゐる者もありして、何人にしても不安な思ひに包まれてゐるのが、清鷹の眼についた。しかも東大寺の鐘は平生の如く殷殷と緩やかに響き渡り、知らぬが佛の街衢にその日の生活にいそしむ衆庶は、車を曳き、牛を追ひ、荷物を脊負つて、ひたすらに大御代の平和を楽しんでゐるのであつた。

清鷹は近衛府にあつて事務の書面に目を通してゐる間にも、今日も姉を訪問して、どうでも逢つて見ようとの思ひに驅られてゐた。それにしても雄田鷹がかうした場合に、何とも云つて來ないのが不思議でならなかつた。暨せ佛舍利の場合にはあんなに勢つて、東大寺の境内で道鏡法王非難の聲を自分に聞かせながら、二年経た今、その時の氣遣ひが、實現して來たのに、何の音沙汰のないのは、道鏡法王の寵を得て、すつかり軟化して了つたのではないかしらとの疑ひさへ抱かれた。然うして正午前少し手隙きとなつたので、雄田鷹に自分の方から逢ひに、中務省へ出懸けて往つた。兵衛府を出て、五六十歩程歩むだと思ふと、彼方から雄田鷹が兄の宿奈鷹と何か話しながら連立つて、此方へやつて來るのが眼にとまつた。

急ぎ足に其方へ近寄つて行くと、雄田鷹の方でも認め、もうお互の顔がはつきりと見られる

と、雄田鷹の方から先に禮を行ふのに清鷹は應へた。

「兄上、直ぐ後から參上致しますから、一足お先へお越しを願ひます。私は清鷹殿に少し話したいことが御座います」

雄田鷹が宿奈鷹に然う云つてゐるのが、清鷹の耳に這入つた。然うして參議宿奈鷹は清鷹の禮に應へてから、彼方へ遠距つて往つた。

「清鷹殿、その後かけ違つてお目にかゝりません、今度の御神託の一條、嗚かし御心痛のことと存じます」

「私はそれに就て、二年以前のお約束に基づき貴方の御意見を承はる可く、お目にかゝらうと只今之迄出懸けてまゐつたので御座ります」

「然うで御座りましたか、私も昨日からは非貴方にお目にかゝらうと願つてゐましたが、何やかやと今度のことと忙しく失禮いたして居りました。清鷹殿、道鏡法王の飽くなき野望の顯れと御思ひになりませんか、人臣としては許し難き、罪死に當ります」

「御同感では御座りますが、私には御神託となつて顯はれましたのが、はつきりと判らないので御座ります。御神託を疑ふては相済みませんが、苟くも國土の安泰を圖り、皇室を守護し給

ふ神のお心の示現としては、何としても會得がなり兼ます。それに今一つは宇佐八幡大神の御神託であつたにしても、かゝる不敬不信と思惟せらるゝ御神託は、道鏡法王並に内閣員にて然る可く處置あつて、上奏し奉らざる方法が取られたであらうとも存ぜられます。世上の諺にも、皇帝は十善、神は九善と申し、大神の神位にしても、朝廷でお贈りになるので御座います」

「仰有る通りで御座います。朝廷に仕へ奉る者のうち心ある人達は一同、道鏡法王が自己を避けて、進守大夫法均尼に依て御神託を上奏し奉りしを、不敬とも卑怯であるとも解して、先づ以て非難の聲を擧げて居ります」

雄田鷹は何故か清鷹か質す趣旨に答へずに、言葉を外らすのであつた。

「仰せでは御座りますが、私は昨日御神託があつて後、内閣員の中に一人として、上奏し奉ることに就て、非を稱へた人のないのを不思議とも存じ、齒痒いとも存じて居ります。上奏し奉りし上は如何になり行くことかと、私は昨夜は夢をよう結び得ませんでした」

「いつに變らぬ清鷹殿の誠忠のお志、雄田鷹ほとく感じ入ります。今となつては矢は既に弓の弦を離れ、如何なる的にあたるかゞ觀物で御座ります。私は之より同族の者が或る館に集りて、御神託に就て評議いたす席へまゐりますが、私は只今は右兵衛督の役目、皇室に仇なす者

は兵を率ゐて討伐いたすのに、躊躇は致しませぬ」

「私も近衛將監、然る者が顯はれたり定まりました節には、一番に走せ向ひます。さてそれが然うなりますか、法王の術策が恐ろしい御座ります」

「清鷹殿、よし法王が如何なる術策を用ひませうとも、天は非道にくみせず、術策を用ひれば用ゐる程、自己の墓穴を掘るに過ぎないのだと存じます。唯それに就て宸襟を惱まし奉ることを恐れて居ります」

雄田鷹は昂然として、その顔に得意の色を浮べてゐるのを、清鷹としては怪訝の念に堪へなかつた。

「宸襟を惱まし奉ることは私とても同様恐懼の至りだと存じます。相なる可くは平和の手段を以て、御神託が實行せられるのを阻止せねばならないと愚考仕ります。雄田鷹殿之からお出向きある藤原御一族の會議の模様、明日にても私にお聞かし下されば重疊の至りだと存じます」

「承知いたしました。もとよりかくとお耳に入れしは、初めより會議の次第を重ねてお告げ致す所存で御座りました。清鷹殿此處にかうして話して居りましたは人目に立ちます。あれ彼處に此方を見てゐる人の姿も見られます。道鏡法王に味方してゐる輩合は、今度の御神託を非議

する者に探索の眼を睜つてゐるのを心得てゐねばなりません。かうして立話してゐるのは、私が貴方に姉君法均尼殿の消息を伺つてゐたと、何人かに聞かれた節にはお答へあるやうにお願いいたします。それでは之でお別れ致します」

「それではお別れいたします。御同族の會議の模様を御知らせ下さるやう、重ねてお願い申し上げます」

清鷹は念を押して、雄田鷹が立去つて行く後姿を見送つてから、近衛府へ歸つたが、巡視の番が廻つて來てゐたので、再び近衛府を外に出た。然うして宮闕の各門の番兵の檢閲を済すと、法華寺へ向ひ、其處での役目を果すと、昨日と同じやうに姉を訪問したのであつたが、やはり逢へなかつた。今日も多忙故に逢はれないとの御口上が、取次いで下されたお方から傳へられてまゐりましたと、清鷹の訪問を取次ぐ人の許迄申入れた法均尼附の婢は、氣毒さうに清鷹に答へたのであつた。

法均尼の慟哭

二日續けて訪問したに關はらず、姉に逢へないので、清鷹は可なり焦燥な思ひに驅られもしたし、その後の御神託の處置に就て、政府から何等の發表もなく、善惡とも容子を知る術もないので、憂ひが深うなるばかりでもあつた。然うして御神託が下つてからの三日目、清鷹は近衛府に出仕すると、昨日の約束に従つて雄田鷹から、何等かの報告があるであらうと待つてゐたが、正午になつても一向に報告は齎されて來なかつた。飽迄秘密にしなければならぬのは解つてゐるので、善意に解して咎める思ひは持たなかつた。

午後になつて清鷹は巡視に出懸けると、根善く姉を訪問した。姉から何等かの消息を得て、憂ひの思ひを消し得たならば、それに上越す幸福は無いし、若し事態が悪であれば、それに就て自己の所存の程を固めたいとの思ひに外ならなかつた。今一つ宮中住居の姉へ自分の意見を述べて置くことは、決して徒爾ではないとの勢ひ込んだ考へもあつた。

姉へ面會を頼んで、姉の房に待つてゐると、取次ぐ人迄申込んで行つた婢が歸つて來て、

「もう直ぐ下るから、待つてゐてくれるやうにとの、お言葉が傳はつてまゐりました」

それを聴くと、清鷹はほつとした氣がして、來た甲斐があつたと喜んだ。聽て暫時すると、姉の法均尼は下つて來て、いつものやうに小鳥の囀り聲が聞かれる明るい房で、清鷹と對座した。一目その容貌を見て清鷹は驚いた。眼は落窪み、頬は瘡け、血色も善くなく、十日程以前に訪問した時の元氣のいゝ容子とは別人であるかの如く見られた。如何に御神託があつた後の此三日間を苦惱したか、姉が語らずとも能く解り、胸が詰るやうな思ひがした。

「姉上のお容子のお變りやう。お瘡せになりましたなあ」

「其方の顔にも瘡せが見えます。心配なされたのであらう」

姉と弟とはまだ何事も語らない中に、語らずともお互ひの心は通じて、語らずとも何故に瘡せたのを解し合ひ、法均尼が先に落涙したのに續いて清鷹も落涙した。然うして法均の涙は止まらず、果ては慟哭するやうな有様となつた。

「姉上、お語りなくとも姉上のお心地は清鷹には能く解ります。御神託が下つた後の御心痛、嘸かし夜も能くお眠りにならなかつたことと存じます」

清麿は氣を勵まして涙を拭ひ、それから姉をも勵ますやうに語氣を昂めてゐた。

「其方が察してくれる通り、私は此三日の間夜もおち／＼眠り得ませんなんだ。定めし聞いたであらうが、御神託を畏れ多くも上奏し奉りし後の私の心勞、傳へ聞いた朝臣達は、以前の佛舍利の時と同じやうに、私を非難されたことであらうと察せられもしますし、私自身かうした恐れ多い御神託を畏み／＼上奏し奉りて宸襟を惱まし奉るやうになつた罪が考へられました」

法均尼は漸く涙を拭つて語り出した。

「何故に法王は御自身で上奏し奉らずに、恐れ多くも上奏し奉る役目を姉上に振向けなされたのでしようか」

清麿の口に然うした言葉は浮び出たのであつたが、總ては終了した御事であつたし、姉は一層心を痛めるであらうと考へられて、云ひ扣へた。法均尼は些つと言葉を切つてから先へ語り續けた。

「何故に此のやうな恐れ多い御神託を、法王初め内閣員の御方達丈で、拜承するに止めて置かなかつたであらうと、私には果しもなく考へられます。日本の皇室の彌榮えを圖らせ給ふ大神の御神託としては、恐れ多くはありますが筋が通りませぬ。經文にも曲つた心の者には、物

が曲つて見え、正しき心の者には、物が正しく見えると有りますし、また心邪なる者の眼には誠の御佛の姿は映らないとあります。太宰の主神中臣習宜阿曾鷹殿は邪な人でないにしても、人間としての慾心がないと定められましようか。若し道鏡法王への歸依の心が深く取入らうとするのであつたなら、眞實の神の御聲を聞き得ずに、然うした自分の心の聲を聞いて、神の御聲だと信ずる誤りが無いとも限りませぬ。かへす／＼も内閣のお方達が、國家には害になるかうした御神託を、今一應の吟味をも遂げずに、直に上奏し奉るやうに爲されたのは、臣道を盡したものであるとは、私には何としても考へられません」

法均尼の眼にはもう涙が乾いてゐた。然うして烈々たる氣魄が、忠誠の一念と、御佛への信心で清らけく澄み切つた容貌に浮んでゐた。

「姉上の御言葉聞きまして、私は意を強う致します。姉上の仰せられたその通りのことを私も考へ附きまして、志を同うする他の人に語りも致しました。國の人心が頽廢致しまして、かうした御神託が生れて來たやうに思はれますし、國家の本義を辨まへぬ頽廢した人間の心にかうした畏れ多い御神託が生れたのだとも思ひます。然うして此後何となりまますことやらと、私は氣遣ひでならず、その爲に私は今日で三度、姉上は何かと御心勞であらうし、またお多忙

であらせらるゝと存じながらも、強いてお伺ひいたしましたので御座ります。微臣、雲の上の御事どもを猥りに聴き知らんとするのは潜越の限り、眞に恐れ多く、憚あることで御座りまするが、姉上には聖上のお側近にお仕へ遊ばす御身、清鷹の心中をお察し下されまして、少しなりともお洩らし下さいませれば、有難き仕合せと存じ奉ります」

清鷹は其處に手をつかへ、最早單なる姉弟としてとなく、聖上の御側近に奉仕する女官尼への敬意を態度に見せて、頭を下げた。

「弟であつても宮中の御事どもを洩らすは、恐れ多く、務めの掟にも反するので、云ひ扣へねばなりませぬが、今度は姉に次で其方が重いお役を務むるやうになるらしく思ひ附かるゝ節もあるのです、少しは話して聞かして上げて可いと思ふが」

法均尼は然う云ひはしたが、猶も口外するのに躊躇ふ氣味を見せた折柄、婢が周章しく房の中へ這入つて來た。恭しく其處に手をつかへ、

「申上げます。只今近衛府から將校のお方がお越しになりました、此方に近衛將監藤野真人和氣清鷹殿がお出でになつてゐるであらうと存ずる。朝廷からの火急の御用向きを以て清鷹殿を訪ねて參つた。急ぎ清鷹に面會が出来るやう取圖つてくれいとお口上で御座ります」

それを聴くと、清鷹は婢の方を回顧り、

「私に面會をしたいと仰せられて近衛府のお方が見えられたのであるか、それでは直ぐお目にかゝると致さう。姉上それでは私は之で失禮致します」

清鷹が急ぎ立上り、それにつれて婢も立上るのを法均尼は眼にすると、

「その御方は朝廷からの火急の御用向きをもつてお越しあつたとのこと、それでは女官面會の應接室へお通し申した方が可からう。清鷹殿其處でお目にかゝつてお話を承はるが可いと思ひます。然うしてお話を承つたなら、もう一度此處へ立寄りなさるがよい。待つて居ります」

法均尼は弟と婢とに合せ傳へる言葉を述べて、婢に導かれて房を去つて行く弟を見送つたが、その顔には微かではあつたが安心したやうな思ひの影が上り、眼も冴々して來たかのやうに見られた。然うしてそのまま凝として動かず、聽て何事か考へる態に眼を閉ぢて、恰も木像の如く靜思の境に安座してゐるのは、聽て再び姿を見せる弟を待つのもあらうし、弟へ朝廷からの火急の御用との言葉を胸に載せて、あれこれと考へてゐるのもあらう。

ほんの少しの間、御佛への供養なれば、燈火を捧げ、水を供へ終へたばかりと思はるゝ程なのに、清鷹はもう姉の房へ立戻つて來た。近衛府から來た同僚の將校に逢ひに出て往つた時の

容貌とは違つて、恐懼の思ひが顯はれ、緊張し切つた色を頬に漂はしてゐた。

「姉上、私へのお召しで御座ります。急ぎ法華寺の 聖上の御前へ出るやうにと、侍従職からの命令を同僚は傳へてまゐられたので御座ります」

清鷹は座に就くと、餘りとは思懸けない御命令の下つたのに愕いてゐるらしく語つた。

「左様であつたか。然うであらうと私は思つて居りました。それでは私も出仕せねばならない。清鷹殿、其方は此處から直ぐ參殿なさるがいゝ。口を嗽ぎ、身を淨め、髪も調へたがいゝ。私は其方よりも先に出仕することに致します」

姉が立上つて大御前へ出仕するのを清鷹は見送ると直ぐ、自分の準備したくに取懸つた。

御宣命清鷹に降る

法華寺へ參候した清鷹を、恐れ多くも忝けなくも 聖上は牀下に召させ給ふたのである。然うして 聖上には清鷹に宇佐八幡宮に參進して、改めて神託を受けて来るやうに仰せを下され

給ふたのであつた。

一度あつた御神託に對し、重ねて清鷹に御神託を得て来るやうに命じ給ふたのは、 聖上の御夢の中に八幡大神の使が顯はれて、

事を奏せむ爲に尼法均を請ふ

と御告げ申上たからである。 聖上はその御夢の中で、八幡大神の使に

法均は女子の身、纖弱にして遠路に堪へ難し、清鷹をして代らしめむ

と宣のたまはせられ給ひ、かくして清鷹に宇佐八幡宮參進の命を下し給ふたのである。眞に恐れ多い極みであつて、如何に今度の御神託に宸襟を惱まし給ふたかゞ拜察されるのである。

鞠躬如として大御前を退下した清鷹は、參殿し奉る時に身の清淨を慮つて、不用の品々を姉の房に預けて來たので、それを受取らん爲に、姉の法均尼の許に赴いたのであつたが、法均尼は弟は来る可きものと思考してゐたらしく、出仕から下つて、待つてゐてくれた。清鷹の顔を見ると、

「畏れ多い御宣を頂いて、先はお目出度い家門の譽れ、其身の譽れ、お祝ひ致します。それと共に使命の尊さ、嚴さを思うて、其方は身命をかけねばなりません。其方にその覺悟が出來て

居りますか。姉として氣遣ひでなりませぬ故に新に問ひます」

「姉上、清鷹本年三十七歳、幼少和氣の里を姉上と共に生まして、今日從五位下近衛將監としてかくあるのは、一重に皇室の御恩寵の致すところで御座ります。臣としての務めの第一は、聖慮を安んじ奉ることであつて、いつにても身命を皇室の御爲に捧げる覺悟は、今迄に幾度も姉上に申上げました通りで御座います。今度の畏れ多い御使命は、眞に國家の一大事、此爲に私の生命を差上げる事は、少しもためらひは致しませぬが、それよりも使命を全うし得らるか否やに就て恐れを懐ひて居ります。姉上は先刻經文のお言葉をお引きになつて、邪なる者には眞實の御佛は見得られぬものと仰せられました。その如く清鷹の才能未熟にして、若し大神のお心に適はず、御神託を受け得られないやうなことになりますれば、何としたならばよろしいやらと、そのみがか今から案じられてなりませぬ」

「其方が然うした謙遜した心地を懐いてゐるのであれば、必ず大神は照應ましますに違ひない。況して畏くも、聖上の御宣命を頂いて行く其方、大神が見捨て給ふ筈はありません。今迄も然うであつたであらうが、今日よりは一層敬神の念を昂め、精進齋戒して、ものゝ不淨を忌み厭はせ給ふ大神の御旨に逆らばぬやう氣をつけたがい。其方の誠意潔白の一念に曇りが生じた

ならば知らぬこと、然うでなかつたならば、人の誠を納れさせ給ふ大神、感應を給ふのは必定である。かへすゝも其方の今度の使命は國家の一大事、眞實の神の御聲を聞いて、都へ還らねばならないのを、肝に銘じて、神へ祈願を捧げ、神託を得て恙なく都へ歸つて来るのを、私も御佛へお加護のお祈りをして待つて居ります」

「姉上の御諭示やらお教示、有難う存じます。私は明一日は旅の準備を調へまして、明後日早朝都を出立致さうと存じます。其間姉上とは暫時のお別れ、御奉公大事に、恙なくお在すやうにお祈り致します」

「あゝ、然うなさるが可い。早い程が可いと思ひます。侍從職の人達が、今日にも中務省から難波津の船方へ命令を下して、其方がいつでも船に乗り得らるゝやうに、準備さして置かうと話し合つてゐられたのを私は聞きました」

「然様で御座りましたか、其れでは私は之でお暇いたします」

「嗣子や子供達が其方の留守の間を寂しがるであらうと思ふと、いとしい。出立の際に見送つて上げたいと思ひもしますが、務めある身には出来ぬこと、海路の平安を祈ります」

法均尼は立上つて歸つて行く清鷹を房の出入口迄見送つて來た。

道鏡法王の誘惑と威嚇

翌日清鷹は妻の嗣子に手傳はして、自分の館で何かと旅の準備にいそしんでゐると、内閣から使ひが来て、

「急ぎ内閣へ出仕あるやう。道鏡法王太政大臣が御待受けしてゐらせられる」

との旨を傳へて來た。それで清鷹は服裝を調へて急いで内閣へ出仕した。

道鏡法王太政大臣は内閣の建物の中にある太政大臣の私室にあつて、清鷹の來るのを待つてゐた。清鷹が内閣の下役人に導かれて、その室に入り、遙に下手に座して恭しく禮を行ふと、

「清鷹能くぞ參つた。すつと前へ進むがい」

いつもとは違ふ威嚴を去つた上機嫌らしいに、こやかな顔附で、優しい言葉を懸けた。清鷹はその言葉に従つて、膝行して法王の側近く迄進んで、そこに手をつかへてゐた。

「今度勅命を受けて、宇佐八幡宮への御使ひ、遠路御苦勞である。明早朝出發致すと聞いたが、

然うであるか」

「はい、左様で御座ります。侍従の方達がなる可く早い方が可いと仰せられますので、左様に定めまして御座ります」

「うむ、それが可いであらう。清鷹、其方は今度の使命の重大さを心得てゐるであらうな」

「はい、能く承知して居ります」

「それに就て、何か其方に考へがあるか。あるならば聽かう」

「別段考へとは御座りませぬが、御神意の程を確と拜承致す迄は、死すとも歸るまじと決心致して居ります」

「然うなくてはならぬ。其方は姉法均尼に代つて往く者、法均尼は宮中のお覺え目出度く、御側近にお仕へ申上げて、宮中の御儀は何事も能く心得てゐる。其方は今度の御使ひを拜した後、姉法均尼に逢つたか」

「はい、宮中を退下致しました後、姉を訪ねまして逢ひまして御座ります」

「法均尼は其方へ何か話したか」

「別段之と申して話しは致しませぬが、使命の重きことを語り、眞實の大神の御意を承つて歸

るやうにと申してくれました」

「うむ、それだけであつたか」

道鏡法王は稍物足らぬ氣な持面を見せたが、些つと切つた言葉を直ぐ繼いで、

「清鷹、太宰主神中臣習宜阿曾鷹が朝廷へ奏進し奉つた宇佐八幡宮の御神託と、其方が明日都を出發て、拜承しに參る御神託と喰違ひがあつてはならぬと思ふが何うぢや」

「はゞ」

清鷹は、それ迄道鏡法王の顔を仰いでゐた眼を下けたが、點頭きはしなかつた。

「阿曾鷹は御神託を畏くも拜承したればこそ、朝廷へ奏進し奉つたのである。御神託が二つあつてはならない。その邊のところを其方は篤と慮らねばならないであらう。阿曾鷹は大神に身近うお仕へする身、平生に精進潔齋して、汚穢を忌み厭ひ給ふ大神のお心を迎へ奉つてゐるのである。其方は近衛將監、大神へ奉仕する心に疎はなからうが、職分が違ふので深うないのを其方自身で知らねばなるまい。若し間違つた御神託を拜承するやうなことがあれば、朝廷へは不忠、のみならず其方は世上の物笑ひとならねばならいであらうと思ふが何うぢや」

「仰の通りで御座ります。日本の皇室の彌榮えと、國土の安穩を守護らせ給ふ大神への、崇信

の念は、清鷹何人にも劣らないと存じまするが、神官ではない身の、眞の大神の御神意を拜承し得られるか、何うかと案じて居ります。唯一重に朝廷の御威光と、私必死の丹誠を以て、御神意を伺ひ奉り、御神託を得て歸らうと存じて居ります」

「うむ、繰回し申し聞かすが、一度ありし御神託に、再度の御神託を請ふのは前代未聞、誠は大神へ對し奉りて、畏れ多い次第なのである。一度下されし御神託を、若し否とするやうなことがあれば、神への不敬此上もない儀であると、其方は思はぬか。然うして若しそのやうなことを行つた者があるならば、一度宣はせられた御神意を曲げる辟事であつて、その御神罰は子孫々の末に至る迄も受けねばならないであらう。

清鷹、其方は垂仁天皇の御孫弟彦王を祖先として十一代目の子孫、血統家柄とも立派であるのを私は能う知つてゐる。今迄其方の位階なり、役柄の低かつたのは、今度のやうな大切な使命を受けるやうな機會がなかつたからぢや。今度こそ大功を立つ可きである。一度宣はせられ給ふた御神慮の程を曲げることなく、世間の物笑ひとなるやうな復命をも爲さず、主神である阿曾鷹が拜承した御神意を、其方も變ることなく拜承して歸つて參つたならば、その功績の大きなを嘉して、私は其方や阿曾鷹が齎らした御神託に顯はれた位に昇つた後に、其方を太政大

臣の位に昇してやらう。そのことを今から約束して置く。構へて心惑はず、大神へ不敬を働くやうなことを爲さず、大功を立てゝ来るがよい。」

「數ならぬ身に重々有難きお言葉、清鷹深くお禮申上げます」

清鷹は何等意見がましいことは述べずに、町重に頭を下げた。その容子を凝と〇つてゐた道鏡法王は猶も不安心に思つたらしく、更に語を繼いで、

「今一つ云つて置きたい。今度の御神託は、私の身に關つた事柄である。私は私の身の譽になることを爲てくれる者を喜ぶ。之は誰しも同じことで、其方は然うした人の心地を能う考へる必用があらう。私は法王であつて太政大臣である。朝廷にお仕へ申す朝臣の任免廢黜はもとより生殺與奪の權も與へられてゐるのを、其方は忘れてはならぬぞ」

此言葉を道鏡法王は、今迄の優しかつた容子を、急に清鷹がいつも眼にする威嚴極りない態度に變へたばかりか、威嚇するやうな調子を含めて述べたのである。

「はい、委細心得まして御座ります」

それにも清鷹は恭しく頭を下げて見せた。

「それではもう退つてもよろしい。海路氣をつけて恙なく日向國へ渡るが可からう。立派な復

命を齎して歸つて来る其方を待つて居るぞ。旅への餞として先刻其方の館へ贈物を遣はした。受取つて置くがよい。」

「重ね々のお心遣ひ有難う存じます」

清鷹は退出の禮を行つてから、道鏡法王の前を辭して、外へ出た。

路真人豊永の友情

清鷹は内閣の殿堂の前面に敷かれた白砂を踏んで、街路へと出る前面に聳つ宮闕の門の一つの方へ歩みを進める間を、法王の口から語られた言葉の一つ／＼に就て考へを纏めてゐた。道鏡法王が最後の言葉として、自分は法王であつて、朝臣の廢黜任免はもとより生殺與奪の權を與へられてゐるから、自己の意に滿たない、阿曾鷹と違ふ御神託を復命したならばと、強い語氣で威嚇したのが、眞先きに胸に思ひ泛んだ。續いて法王の意に叶つた御神託を受けて復命したならば、太政大臣の位に昇してやらうとの言葉が考へられた。阿曾鷹の御神託と違ふ御神託

を拜受したならば、世上の物笑ひになるであらうぞと、恰も諭すやうに述べた言葉など、次に考へれば考へる程、道鏡法王が世にあるまじき惡逆無道な野望を逞しうしてゐる心境が、はつきりと解せられて、憤怒の思ひが燃えた。獅子身中の蟲とも、共に天を戴く可からざる惡人であるとも考へられて憎まれた。殊に自分を太政大臣に昇すとの好餌を以て、その惡を増長せしめやうとした陰險な誘惑手段に、嘔吐を催す思ひを湧上らしめた。

「かゝる野望を打ち挫くのはもとよりのこと、一日とてもその存在を許す可きでない」

清鷹の考へは確と定つたのであるが、果して然うした御神託を受け得られるか、何うかと云ふ點に思ひを及ぼすと、多少の不安がないでもなかつた。阿曾鷹は眞實あゝした御神託を拜受したのではなからうかと考へると、猶更不安が募つた。併し皇室の彌榮えと、國土の安穩を守護らせ給ふ大神は、阿曾鷹が齎らしたやうな御神託を下し給ふ筈はなく、必ず自分の眞心を納れさせ給ふて、眞實の神の御聲を聞かせ給ふ違ひ無いとの思ひに到達して、漸く心を鎮靜め得た。

御門を出て街路を自己の館の方へと志して歩んでゐると、不意に横合の立樹の蔭から、
「清鷹殿」

と、呼懸けて顯はれて出たのは、路真人豊永であつた。

「おゝ豊永殿、只今御役所からのお歸途りか」

「いゝえ、然うでは御座らぬ、貴方が道鏡法王に召されて、内閣へお越しになつたと承はり、先刻から此處の木蔭でお歸途りを、お待受けしてゐました。先づ以て今度重大な使命を御拜受あつたのをお祝ひ申し上げます。次に私の願ひとして、只今道鏡法王と何をお話しなされたか、それが承りたい」

豊永はいつに變らぬ素直なもの云ひをして、餘程意氣込んでゐるらしく、眼を閃々と輝かしてゐた。

「私は歸途りを急ぎますから、歩きながらお話し致しませう」

清鷹と肩を並べて、豊永も歩き出した。

「豊永殿、道鏡法王が、何を私に語られたと思召す。貴方のことですから、何かと思ひ描いてお出でになつたと思ひますが」

「種々と想ひ描きました。筑紫へ下向して宇佐八幡宮から、曲けても阿曾鷹同様の御神託を拜受してまゐると、そのみを繰返し仰せられたと存じますが、如何でお座る」

「御思ひ描きの通りだと申しても可し、申さずとも可し、私は對手の人を憎んでゐた場合にも、その人との談合を、他人に洩らすのは、禮儀に缺けもしますし、心ある者が行ふ可きものでないと信じてゐます。貴方が種々と道鏡法王と私の話しをお思ひ描きになつたのは、今度の御神託に就て、深く御心配になつた餘りと存じますが、新しく御神託を拜受に參る私は、貴方と今迄に幾度もお話した通り、日本の皇室は萬世一系でなくてはならない、それを以て異邦へ誇りとしてゐる國柄であるとの所信を少しも變更して居りません。之を以て道鏡法王が私へお語りになつた言葉を、貴方にお洩らし爲ないお答へとしたいと存じます」

「ふむ、能く解りました。それ丈け承はれば私は道鏡法王が、何を貴方に話されたかを知らずとも、安心してゐられます。流石に私の若い朋友の清鷹殿だ。その信念さへお持ちであれば、國家は安穩、今度の重大なお使ひは、立派に使命が果されます。阿曾鷹が齎らして來た御神託は、唐學の食傷の祟り、道鏡法王が振り蒔いた人心の頹廢の結果から生れて來たのであると、深く考へさせられます。一朝にしてあゝした御神託は生れて來た譯ではありません。私は若しあゝした御神託が御神託として實行され、道鏡法王如き人間が、高御位に昇るやうな日があれば、伯夷叔齊の故事を追ひ、日本の粟を食まずと、飢えて死ぬ覺悟を定めてゐます」

「豐永殿の氣質として、然うであらうと私には察せられます」

「清鷹殿、私は貴方が今度の御使ひを御拜命あつたと聽いて、流石は朝廷にはお眼があると喜ばしく思つて安心してゐたのですが、それが安心出來ないやうになつて、かうしてお待受けしたりしたのは、此二三日種々な流言蜚語が巷に蔓つてゐるのを貴方は御存知でせうか」

「はい、少しは耳に這入つて居りますが、貴方はどんな事柄をお聞込みになりましたでせうか」
「内密に極少數の人達の間に語られてゐるのを聽きましたが、今度の御神託を藤原一族は、道鏡法王を退け得られる最初の手懸りであるとして、寧ろ迎へてゐるさうです。若し道鏡法王が御神託に乗じて、高御位を窺ふたならば、それを機會に皇室擁護の楯を連ね、一舉にして道鏡法王を滅ほろぼじさうと、企畫をめぐらしてゐると申すのです」

「清鷹は然うと聞くと、雄田鷹が一昨日確に開かれたと思ふ藤原一族の内密の會議の模様を報知すと云ひながら報知して來ず、然うして其時の得意さうな顔色なども想起された。忘れてゐたのではないが、最早自分が宇佐八幡へのお使ひを拜受したので、然うした事柄に重きを置いてゐなかつたのである。」

「ほう、初めて承はります。如何なる場合にも、自己の氏族の繁榮を圖り、政權を獲らんとす

る藤原一族、ありさうな事柄だと思ひます。若しそれがさうであつたなら、今度の場合はその意圖にしても名分にしても正しく、我等も協力せねばならないと存じます。私の聞きました流言は、主神阿曾鷹は道鏡法王に媚び諂ひ、官位の昇進を欲して、御神託を恣に捏造して、齎らして参つたのであると申すのです」

「その流言は私も耳に入れました。それも申上げやうと思つて居りました。今一つの流言は道鏡法王側では、手の舞ひ足の踏む處を知らずに喜び騒いで、御神託の實現を期する上から、貴殿の心を法王側に賣收する爲に、先以て官位を進めようと圖つてゐると云ふやうなこともです」

「豊永殿、以前の佛舍利の顯はれました節と云ひ、かうした折柄にはいつも流言蜚語が、烈しく行はれます。お互に自己の信念に基づいて厳しく批判し、猥りに他人が心あつて蒔き撒らす流言蜚語に迷はされるやうなことあつては、臣節を誤ります。私は只皇室尊崇を一念として、他の誘惑に乗るやうなものではありませんから、御心配御無用に願ひます」

「それ承つて私は重ね々安心致します。それではかうして連立つて歩いてゐては、私は兎も角、貴方は今萬人から眼を向けられてお出でになつて御迷惑と存じますから、私は其處の横町

へ曲つてお別れいたませう。何れ明朝の御出立をお見送りいたします」

豊永としては殊勝な心懸けの程を見せて、匆々にして其處に見られた横町の小路へ曲つて往つて了つた。

清鷹の出立

豊永に別れて清鷹は館へ歸り着くと、殆どそれと同時に、道鏡法王が内閣の太政大臣私室で清鷹に語つた贈物が、法王廳の雜人の手で運び込まれて來た。妻の嗣子や子供達、それに清鷹の著料としての呉服や白絹、その外に眞綿、絹絲と顆多しい量であつた。法王廳の雜人が歸り去つた後、奥の房に飾られた法王からの贈物を、憂鬱さうな眼で清鷹が立つたまゝ眺めてゐるのを、側に引添うて立つ妻の嗣子は良人の心を圖り兼たらしく、

「法王様からの贈物は、どうやらお氣に召さぬやうにお見受け申上げられますが、此儘にして置きませうか、それとも何處かお眼に觸れぬところへおしまひ致しませうか」

「嗣子、法王はかうした贈物を下されて、私に阿曾鷹殿が齎らした御神託と、同じお言葉の御神託を頂いて来るやうにと仰せられるのである。しかし此事は誰にも話してはならぬぞ」

「はい、承知致しました。その様な御無理なことを仰せられるのは、何の事はない貴方様が、宇佐八幡宮へ勅使としてお越しになつて、御復命遊ばす御神託を、今から法王様がこしらへてお出で遊ばすやうなものだと存ぜられます」

「左様ぢや、その通りだ。もつと話したいこともあるが、話して其方の心を苦めてはならぬと思ふから、お使ひから歸つた後に悉しいことは語らう。とも角此贈物の品々は、別段取片附けなくともいゝが、私が筑紫から歸つて来る迄は、使用つてはなりませんぞ」

「委細心得まして御座ります」

「我等微臣猥りに口にす可きではないが、當御代に立皇太子御儀はいまだ行はせられずとも、尊い御血統には白璧王、他戸親王、山村王、其他竹の園生の御榮えは目出度く、數多くの御方様が在します。道鏡法王が高御位を窺ふなどと笑止の限りで、道鏡法王に天魔が魅つたのだとも思はれる。然りながら道鏡法王は當代第一の權臣、若し私の御神託の復命が意に滿たない節は、此の和氣の家は取潰さるゝかも知れない。いやひよつとしたら私の生命を取らうともなさ

れるかも知れない。連れ添う妻として氣の毒ではあるが、其方も然うした時の覺悟をして置いて貰はねばなるまいと思ふ」

「能う解つて居ります。女ながらも皇室の尊さ、また朝臣として貴方様が朝廷へどうした心地でお仕へ遊ばしておいでになるかは、豫々のお諭示もあつて、能く存じて居ります。どうぞ私や子供達の事に餘りお氣苦勞遊ばされずに、今度の御使の御役を立派にお果し遊ばすやうにお願い致します」

「それ聞いて私は安心が出来る、此上は唯お仰せを畏み、お使ひを立派に果すばかりである」清鷹の眼には涙があつた。嗣子は猶更泣いてゐた。その涙を隠さうとするやうに、嗣子は良人の側をはなれ、法王からの贈物を良人の眼に觸れなくする爲に、蔽ひ物で贈物を蔽うたりしてゐた。然うして良人が再び旅準備へと、家來達を呼んで爲出したのに、何かと心配りをして手を藉してゐた。

勅命が下つたその夜から清鷹は大神へ御使ひする精進潔齋から、妻とは寢所を異にしてゐた。然うしてこの夜も明けた早朝、清鷹勅使の衣冠を調へ終ると、妻や子供達に見送られて、館の外に出たが、其處にはもう勅使清鷹を乗せる輿や、それを擔ぐ輿夫、それに勅使守護の兵士六

人と待つてゐた。その外に清鷹は自分の家來一人を伴うて行くのであるが、見送り人として法王廳から法臣の圓興が來てゐたし、吉備眞備右大臣の代理者、雄田鷹の代理者も姿を見せてゐたし、近衛府の同僚の誰彼と、館の門前は半は見物の近隣の館の人達も交つて賑やかであつた。其等の人達の一人々々に清鷹は叮嚀に別れの挨拶を交してゐると、遅れ走せに路真人豊永は呼吸せか／＼とやつて來て、

「清鷹殿、道中恙なく目出度く使命を果してお歸りの程をお待ち申します」

いつもの聲高で別れ言葉を述べるのであつた。

「豊永殿、お見送り忝う御座る」

清鷹は言葉少に應へて輿の前に進み、更に見送人一同に眼で會釋して輿の上の人となつた。清鷹にしても従前嘗てなき榮ある旅の門出であつた。子供達三人は母と並んで、館の門際に佇立んで父に向つて禮を行うてゐた。

兵士三人は前に、三人を後にして、清鷹を載せた輿は、清鷹館門前を離れて肅々として歩み、都の出口を目指して歩んで行つた。神護景雲三年六月も早や盡きようとする夏の朝まだき、稍冷氣を含んだ風は清々しく輿上の清鷹の衣を吹いて、清鷹の心地を幾分爽快ならしめた。一行

が都の街を出外れて、難波津への街道へかゝると、田舎から都へ買物に出懸ける者や、物賣りに出懸ける者達は、それと眼にすると、噂で知つてゐる者もあつたし、知らない者もあつたが、嚴な容子にうたれて路の側へ寄つて禮拜した。それ等の者達にも清鷹は眼で應へてやつてゐた。一行が難波津へ着いたのは、黄昏れ近い頃であつた。都から國々へ下つて行く役人、上る役人と往來が烈しいので、其等の人達の爲に設けられてゐる船繋り場所に近い官營の旅館へ、先觸れがあつて一行は其夜を其處で過したのであつた。途中の輿の上で清鷹はつれ／＼であるまゝに作つた和歌一首を、翌朝輿夫達が都へ歸つて行くのに托して、留守する妻へと贈つた。

西の海たつ白波の上にして

なに過すらんかりの此世を

路真人豊永が若し道鏡法王が高御位に登るやうなことがあつたなら、伯夷叔齊の故事に倣つて飢死すると、清鷹に告げたのと同じ心地を清鷹にしても持つてゐて、和歌に思ひを述べたのであつた。兵士達の眼に觸れぬやう、懷紙に記ろしたのを封書にしたのは云ふ迄もない。然うして渚にすつかり用意を調べてゐる船へと、守護兵士六人、家來一人を引連れて乗込んだのであるが、海の面は恰も清鷹の使命を祝福して迎へるやうに朝風になぎてゐたのみならず、船出

には目出度い東風がそよいでゐて、船主が帆を上げると、船はひとりでに西に向つて駛り出すのであつた。

清麿は此船の上で、船主達からはしなくも中臣習宜阿曾麿が昨日の早朝、同じ渚から船に乗り込んで、筑紫へと匂々として歸つて往つたのを聞いた。そんなに急いで歸へる可きでないのに、然うした行動を取つたのは、今度の御神託が事滑に運ばずに、自分と云ふ勅使が送られるやうになつたのを恐れて、何か新しい企圖くわだてを持つたのではなからうかと、多少要慎する心地になつたのである。

宇佐八幡宮

一

湊々の船繋りにも事なく、烈しい風にも遇はず、海路恙なく十日餘りの日数を重ねて、勅使藤野和氣清麿を載せた船は豊前國の宇佐八幡宮から程遠からぬ濱邊へ到着したのであつた。上

陸したのは晝少し過ぎた頃であつたので、そのまま船路を共にした兵士六人と、家臣一人を従へて清麿は宇佐八幡宮へ参進したのであつた。

宇佐八幡宮には年にすれば數度、勅使が都から又は太宰府から参向するのを迎へる爲に、宿泊の迎館が設けられてゐた。清麿は家臣や兵士と共にその館へ這入り、其日は休息したが、嚴しい潔齋は取つたのである。神官達は大周章にて違て、前觸れのなかつた御勅使を迎へたのであるが、その實阿曾麿が前日に到着した形跡があつて、どうやら清麿が勅使として参向して來るのを、阿曾麿から耳に入れてゐるらしい容子もあつた。宇佐八幡宮の主神は韓島勝與カラシマカツヨ豊咩トヨミヤと云ふ筑紫生れらしい色黒で、大柄な、表面は眞面目さうな人柄に見られたが、清麿の眼には阿曾麿の亞流としか映らなかつた。

宇佐八幡宮は古い由緒を有する大社であつて、伊勢につぐ宗廟として崇められてゐるのである。御祭神は三座にお座はしまして、一の御殿は八幡大神、御名は舉田別尊ホコタノワケノミコト即ち應神天皇の御神靈にましまして、二の御殿は比賣大神ヒメノオホミカミにましまして、多岐津姫命タギツヒメノミコト市杵嶋姫命イチキジマノヒメノミコト多紀理姫命タキリノヒメノミコトの三女神奉祀されてゐるのである。三の御殿は神功皇后、御名、息長帯姫命オキナガオビノヒメノミコトをおまつり奉つてゐるのであつて、此三殿の神々は宇佐八幡の大神として、三神御一徳の限りない御神恩を、常々

國家と、全國民の爲に垂れさせ給ひつゝあるのは、誠に有難い極みなのである。

到着したその日を精進潔齋に過した清麿は、翌日の朝、更に齋戒して勅使の衣冠を調へ終ると大尾山山頂に鎮座します大神前へ参進したのであつた。山の麓迄の玉砂礫の敷かれた参道を一の鳥居、二の鳥居、三の鳥居と潜る間は、神官の先導もあり、兵士の護衛もあつたが、山麓に達し、高い石段を登つて、社殿に鎮座します大神前へ参進するのは御勅使一人であつた。御勅使の穿く木履が石段を踏んで憂々の音を立て、それが石段の兩側に聳立つ鬱蒼たる立樹の間へと木霊を呼んで、四邊へと響き渡るのが、森嚴極りないものであつた。御勅使藤野和氣清麿の心は、一重に大神へ對し奉りて畏懼の念に満ち、同時に都にありし日の諸々の汚穢の雜念を一切捨て去つて、水の如く清淨に澄み渡つてゐた。

夏七月十一日、蒼空は晴れ渡つて、浮雲の影一つ見られず、清々しい微風が吹いて来て、樹立の松に嘯いて松籟を起してゐるのに、清麿は耳も藉さなかつた。社頭の閑寂を愛して樹立の間には幽鳥が啼いてゐたが、それにも耳をかさなかつた。鞠躬如として唯是れ、使命の達成を遂げ得ざるやを恐れて、敬虔の至誠を靈魂に刻んで、石段を一步々々上へと登つて往つたのである。石段は既に盡きて、前面に勅使門が見られた。平生は閉ぢられてあつて、一般の参拜者

は其處で止まり、其處から拜禮せねばならないのである。今日は神官の手で門は開かれてあつたが、側に御手洗水のあるのを眼にして、清麿は其方へ近寄ると、待設けてゐた神官の一人は、柄杓を取つて御勅使清麿に淨めの水を進めた。

手を洗ひ、口を嗽いでから、勅使門を潜つて清麿は御本殿の前に進んだのであるが、大鎮まります御神殿は、檜皮葺の御屋根高々と、夏の日に輝いて、壯嚴、清淨限りないものであつた。御神殿の階下に立つと、清麿は柏手をうつて恭しく拜禮した。それを終ると用意して来た今度の使命を書き記した大神への奉奏文を取出し、繰りひろげたのを兩手に捧げて、奏進した。一心こめたる莊重なるその聲が、一鳥啼かざる御神境の四邊へ徹し、閉されてある御神殿の扉へと響き渡り、大神も感受ましますかにみられた。奉奏文を奏進し終ると、それを以前のやうにたゞんだが、それを手にした笏の上に捧持したまゝ、其處に跪き、頭を御神殿の階の端に觸れんばかりに下げて、大神の御聲の下るのを待つた。

少しばし、突如として聲が御神殿の上方から響いて來た。先づ、

御神託

と呼ばゝる聲がして、直ぐ續いて、

弓削道鏡をして天位に昇らしめば天下太平ならん

清麿は愕然とした。皇室と國土の安穩を守護らせ給ふ大神が、然る御聲を下し給ふ筈はないと、確く心に信じてゐたのに、再び然うした言葉が綴られて耳に聞かれたのであつた。恐懼の念にうたれはしたが、御神託と呼ばゝつたのに不審しい思ひもしたし、それにその御聲に、大神の御聲とは思はれぬ濁つた調子が潜み、普通の人の聲とも感じられる節もあつたので、眞に恐るゝ顔を上げて、御聲の來た方を仰ぐと、何ぞはからん、其處には主神の盛装をした宇佐八幡宮主神韓島勝與豐咩が、手に御幣を捧げて、恐れ多くも神殿階の上に立つて、勅使を見降し、聲は正しくその口から出たのが解つた。

主神韓島勝與豐咩は平生大神にお仕へ申上げ奉り、常に大神の御聲を聞く職分にあるにしても、今朝は勅を奉じて清麿自身にて大神の御聲を拜承せんと參進して階下に膝伏してゐるのである。それに何ぞや主神の役に倣り、大神との中間に立つて、大神の御聲を傳へんとするのは、非禮の甚だしきものであつて、勅使に對しての不敬はもとより、分を越えたる舉動であると、清麿には思惟せられた。

「主神韓島、お下りあれい。今朝は長くも勅を奉じて、藤野和氣清麿、直かくに大神の御聲を拜承せんとして參進して罷りある。お下りあれい。非禮であらうぞ」
威嚴ある聲で叱咤した。御勅使の威光と、清麿の氣色を勵ました容體に屈伏して、主神韓島勝與咩は匆惶として階を降つて階下に遁れ、悄然として勅使門外に姿を消して了つた。然うして御神殿前は再びもとの清淨、壯嚴、閑寂の神聖な境地に立回つた。

二

清麿は思ひも寄らぬ主神韓島勝與豐咩が、都へ中臣習宜阿曾麿が齎したのと同じ御神託を呼稱したので、叱咤して退けはしたが、心中安からぬものがあつた。阿曾麿、勝與豐咩と主神二人が、同じ御神託を拜承したのだとすれば、大神は眞實然うした御神意であらせらるゝのかと、恐懼措く能はざる思ひが生じたが、皇室安泰國土擁護の大神に、何すれぞかくの如き御神託があらせらるゝ筈はないとの信念が、直ぐさうした疑惑を拂ひ退けて了つた。

清麿は心を鎮め、再び御神意を拜承せんとする心境を調べ、拍手を打つて拜禮し終ると、
「今大神が御託宣あらせられし御旨は、これ國家の大事なり、主神の託宣信じ難し、願くは神

異を示し王へし

畏み／＼て言上し果てると、重ねて清鷹は一度奏進した奏文を、聲を擧げて読みはしなかつたが、既に暗記してゐた奉奏文を心の中に繰回して讀上げ、敬虔の念を盡して、兩度拜跪し、御神異の示現を待つた。

それは自己を空しくしたものであつた。前人未到の地の巖間から迸り出づる巖清水が溜つて出来た泉のやうに清淨に澄める心境でもあつた。然うして虚無の靈界にも居住するのを許さるる無垢玲瓏の靈魂を把握し得たのであつた。かうした靈界人界有無相通する神秘境に漂ふこと暫時、我あつて我無く、渺渺たる天地の間に、大神の呼吸を感じ得らるゝやうに覺えたのたのであつたが、忽ち神殿が雷の轟く如く鳴動したのを知覺した。と、清鷹は少しく頭を上げたとも覺えぬ夢うつゝの眼に、神殿の前に顯はれ給うた大神の御姿を拜し仰ぎ得たのであつた。

御身長けは三丈ばかりにましまして、御色は満月の光りの如く輝き、渡らせ給ひ、その爲めに清鷹眼は眩み、唇は痺れ、流汗淋漓として五體はすくむよとも覺えはしたが、勅命の威光を帯びてゐるので、心は動搖しなかつた。

我國開闢以來、君臣の分定る、臣を以て君と爲し、こと未だ之れ有らず、然るに道鏡悖逆無道にして、輒く神器を望む、天津日嗣は必ず皇緒を立て、早く無道の者を掃除す可し。汝還りて之を奏せよ。

神意を告げ給ふと見れば、御神殿は再び鳴動し、そのまゝ御姿は掻き消えて、清淨靜寂の御神境に御社殿は仰がれたのであつた。清鷹は大神の御示現を目の當り拜し奉りて、恐懼措く能はず、暫時は其處に蟻伏したまゝでゐたが、胸の動悸を鎮めて漸次に我に回るにつれて、氣力を取戻し、僅に上げた顔は未だ蒼白ではあつたが、眞實の大神の御聲を聽き得た喜悅びに、全身の血汐の沸り立つのを感じてゐた。然うしてその歡喜と、大神の威徳を畏敬して讚め稱へまつる心境にあつて、跪座したまゝで畏み／＼て拍手を鳴らして幾度も拜禮してから、やをら身體を上げ、更に三拜した後に、神前を退下したが、その顔は感激の涙に濡れてゐた。

心靜に石段を下り、山麓に待つてゐた兵士六人と、家來一人に守護せられて昨日來の迎館に入つたが、御神意の尊さ、有難さ、忝さを偲び奉りて、清鷹は又しても感激の涙を頬に傳はすのであつた。かくありてこそ護國の大神であらせ給ふのであつて、動かぬ大御代は之に依てい

や更に礎を固うし得らるゝのである。のみならず微臣自分の如き者に、よしや勅命を拜して來たと云へ、尊い御姿を示現させ給ふた限りなき御愛の程を拜謝し奉る思ひで、清麿は長時間を衣冠をも解かず、自己の室に座して動かさなかつた。

大神の示現を嘘の底に思浮べると云ふやうなことは、畏れ多いことでもあるし、また眞實恐ろしい事柄であるので、然うした不敬は敢てしなかつた。唯しかし阿曾麿と勝與豐咩の主神二人が口に上した御神託が、偽りであつたのを考へて長嘆息せられた。

庭には蟬が鳴い啼いてゐた。その聲を聴くと不圖清麿は都に残した子供三人のことを偲ぶ心になつたが、その時家來の石麿が這入つて來て、餘り清麿が凝として動かないのを心配したらしく、衣冠を脱ぐやうに勧めた。それに頷きを見せてやつて清麿は漸くにして立上り、先づ冠を脱して、多少は汗に塗れた装束を脱ぎ初めた。

その日の午後を清麿は、心に喜びはあつても、大神の示現に恐懼した身心は極度に疲労し限つてゐるので、何事をも爲し得ず、靜に休息を取つた。然うして翌朝になると再び大神の社殿前に進んで拜禮した後、迎館へ立戻ると、机に向つて紙を展べ、硯の墨を磨つてから、昨日以來の敬虔な心を持續けて、大神の示現の次第と、聽かせ給ふた御言葉を詳細に書き綴り出した。

た。

長時間をかゝつて町重に一通を書き終ると、更に今一通書き出した。最初の一通は朝廷へ捧呈し奉る奏文の原案であつた。次の一通は餘りとは御神徳の高きに感激した清麿が、特に宇佐神宮へ納め奉るものであつた。此の二通をしたゝめるのに終日を費やして夜に入つた。

次の日になると清麿は先づ早朝大神の社殿前に拜禮してから、迎館に歸ると、大神の示現の次第を書き綴つた一通を、宇佐神宮に納める手續きを取つた。主神韓島勝與豐咩は病と稱してその後姿を見せなかつたが、他の神官達や、社内にある神宮寺の僧や彌宜尼達は、初めから清麿に敬意と好意を見せて、納める手續きにしても町重の誠を盡して取扱ひ、清麿に不愉快な思ひは與へなかつた。

これで清麿の宇佐神宮での用向きは果て、最早滞在の必要は認めなかつた。衣冠を調へて今一度大尾山の御社殿前へ進み、使命達成の御禮を言上し、猶も皇室と國土の擁護を祈願し、御別れの辭をも奏進して、御社殿前を退き山下の境内に降つたが、その足で清麿は都への歸途に就いたのであつた。

彈劾せられた道鏡法王

宇佐八幡神宮へ参向の爲に上陸した濱邊から、清麿は船出して、来た時と同じやうに烈しい風波にも逢はず、湊々の泊りを重ねて海路何等の障りもなく、十餘日の日数を重ねて難波津に到着し、兵士六人、家來の石麿と一行八人、恙なく寧樂の都へ歸り着いたのは七月廿一日であつた。

その日は夜に入つてゐたので、翌朝になつて歸來した旨を先づ朝廷に届出で、それから近衛府へも届出たが、直ぐ奏上し奉る手続きは取り得なかつた。奉答の奏文を書き綴らねばならない、眞夏の旅で身體をいため、七八日薬餌を取らねばならなかつたからである。朝廷の方でもなる可く急いで、宇佐八幡大神へ使ひした奉答の奏文を差出せいと、御下命はありはしたが、そんなにお急ぎ立てにはならなかつた。聽て元氣が回復すると、清麿は齋戒沐浴して氣を引緊め、宇佐神宮で書綴つたのを原案として、文字の使ひ方に氣を付け、奉答の奏文を書き上げる

のに精根を盡した。

此奏文を認める間、清麿は何人にも逢はなかつた。何人が訪ねて來ても逢はなかつた。又何人をも訪問して往かなかつた。路真人豊永が潜に逢ひにやつて來たが、それさへ妻の嗣子に斷らしめて遇はなかつた。姉の法均尼へは歸來の旨を文で通じはしたが、遇ひに往かうとはしなかつた。宇佐八幡大神の御神託を身に帯びて、朝廷へ上奏し奉らざる以前は、我が身で我身でないやうな敬虔な思ひを持してゐたのである。然うして御神託が他に洩れるやうなことがあつてはならないと極度に慎んでゐた。自分さへ口を噤んでゐれば、他に洩るゝ憂ひはないのであるが、推量さしたり憶測さしてもいけないと思つて、妻の嗣子にさへも片鱗だも窺はしめなかつた。妻にしても知らずのは違法だとしてゐたのである。然うして上奏を遂げない中に、少しでも外間に洩れたりしようものなら、權力に倣つて如何なる陰險なる手段を取るのをも躊躇せぬ道鏡法王が聖聞に達しないやうに、どんな防害の術策めぐらすか、知れたものぢやないと、警戒もされたのである。

奉答の上奏文を念には念を入れて、日を費して書上げて了ふと、今一通朝廷へ捧呈するのよりは、少しく略記したものを作成した。それは道鏡法王の手許へ差出さんとするものであつた

が、同時に内閣へ披露爲す可きものでもあつた。此二通が出来上ると、その次第を朝廷へ上申した。朝廷に依て清鷹が参進する日が定められたが、同じ日に内閣でも御神託を受けることとなつた。

その日になると、清鷹の館へ護衛の兵士が派遣されて來た。清鷹は宇佐八幡大神の大前へ参進した時の勅使の服装を調べ、上奏文を捧持し、御神託使として、兵士に護衛せられて聖上の在す法華寺へ参進したのであつたが、宮内官の手を経て上奏文を、聖上の御手許へ捧呈し終ると、内閣の方へ廻つて往つた。

内閣の殿堂には、清鷹の齋らし歸つた御神託を拜承せんとして、緋衣の法王服を纏うた道鏡法王初め左大臣藤原永手、右大臣吉備眞備、その他大納言、中納言、参議、非参議と内閣員一同の外、各省から少輔以上の大官が三人づゝ呼ばれて参集してゐた。その中には中務省大輔の雄田鷹も交つてゐた。それは今度の御神託が國家の重大事件であるので、道鏡法王の意嚮の下に、内閣員以外の人にも拜承さすやうにしたのである。

清鷹が内閣の殿堂前へ到着すると、中務省主宰の粟田道鷹が階下迄降つて清鷹を迎へた。御神託の威光を身に帯びて昇殿した清鷹は、道鷹の先導で、道鏡法王を中央主座にして、左右に

居流れてゐる内閣員初め、各省の大官達が稍伏目になつて迎へる前面を通つて、道鏡法王よりも上座に進んで立つた。道鏡法王の顔には隠しきれない喜色が動いてゐた。太政大臣の昇進を約束したのであるから、法王が願つてゐる通りの御神託を讀上げるものと信じきつてゐるのであらうと、清鷹には思はれた。永手左大臣は相も變らず無表情の顔だつたが、吉備右大臣の眼は輝いてゐた。氣遣はし氣な色を見せてゐる参議も二三人あつて殿内を呼吸づまるやうな静寂さが支配した。

清鷹は手にした御神託文を押頂くと、眼を上げて法王を初め左右兩大臣、其他の内閣員、各省の高官へと一順瞳を廻した後、御神託文を繰ひろげて讀上げた。何人も頭を下げて恐れ畏む心地を見せてゐるのと一緒になつて、道鏡法王も殊勝氣に頭を下げて、謹んで拜承する容體を見せてゐた。

畏れ多くも宇佐八幡宮の御神意を、ぢか／＼に拜聽した清鷹は強かつた。威容を備へて朗々たる聲調で、宇佐大神が示現まじ／＼た次第を書き記した通りを讀上げると、頭を下げてゐる内閣員の中には、おのゝくやうに見られた人もあつた。續いて清鷹が聲を勵まし、大神の御言葉として、

我國開闢以來、君臣の分定る。臣を以て君と爲し、こと未だ之れ有らず、然るに道鏡悖逆無道にして、輒く神器を望む、天津日嗣は必ず皇緒を立て、無道の者は早く掃除す可し、汝還りて、之を奏せよ。

と述べると、聽いてゐた道鏡は急に頭を擡上げたが、その顔色は紙のやうに白く見られた。一瞬唇を前歯で嚙んで、口惜し氣な心の動きを見せると、漸次に怒りの色を眉の間や頬の邊りに浮べ、清鷹の方を確と睨みつけた眼は、火花が飛び散るかと思はるゝ程に憤怒に燃えてゐた。それは恐らく文を読みながらも、清鷹の眼にも映つたに違無い。かくある可しと期してゐた清鷹には然うした道鏡の怒りは、何等の反應をも與へなかつた。毅然として残りの二三行を読み終ると、心しづかにくり擴げてゐた文を巻き出した。もう頭を上げてゐた内閣員達はお互に顔を見合してから、首座の道鏡法王の方へ瞳を向ける者もあり、清鷹の方へ眼を向ける者もありなどして、三四の人を除いた外は淺間敷い程落着かぬ容體を見せてゐた。清鷹は雄田鷹の方へ眼を向けると、雄田鷹の清鷹を見る眼と、行遇ふたが、雄田鷹は大きく頷いて見せた。

中務省主宰者の參議粟田道鷹は、落着かない側の一人ではあつたが、清鷹の手から御神託を受取る役があるので、道鏡法王に氣兼ねながら、立上つて清鷹の方へ進みかけると、それを遮

ぎるやうに、

「清鷹、その文を此方へ持つて来い」

道鏡は怒りに燃えた荒々しい言葉を、清鷹に投げかけた。御神託を読み終つたので、最早役目を済ました清鷹は、近衛將監の心地に回つて道鏡法王の方へ、手にした御神託を書き記した文を持つて進み、跪いて渡さうとすると、道鏡法王は無禮にも、ひつたくるやうに御神託文を取り上げ、然うして直かくと清鷹を睨めつけた。清鷹は少しだに怯した色を見せず、平心に一禮してから、道鏡法王の側を去つてもとの位置に回り、内閣員一同へ一揖して内閣殿堂を下り、飽迄従容自若たる態度を持續して歸路に就いた。

嗣子の心配

その日の役目を果して家へ歸り着くと、清鷹はいつものやうに自家に祭祀れる神を拜し、佛を拜し、祖先の靈位を拜した後、妻の嗣子に、御神託の次第を悉しく語り聞かした。

次で今日内閣で御神託を讀上げた模様をも語り聞かすと、嗣子は溜息を一つ吐いて、
「法王様は貴方に阿曾鷹殿と同様の御神託を得て来るやうにと、お命じになりましたのですから、そのやうにお怒りの顔色をお見せになつたのは、當然のことで御座いませう。聽て、宇佐へ御参向以前に私にお話になりましたやうな罰が、法王様から貴方様に来るであらうことと存ぜられます」

嗣子は隠くさうとしながらも、やはり心配の眼色を見せてゐた。

「その時も話したやうに、覺悟してゐて貰はねばならない。今となつて打明けるが、道鏡法王は、若し阿曾鷹と同様の御神託を得て来たならば、私を太政大臣にしてやらうと仰有つたのだ。若し私が神に背き奉り、良心を賣つたなら、太政大臣になれたかもしれないが、然うしたことは私には出来ない。嗚はすに利を以てすれば、何人の心をも買取られ得ると考へてゐらるゝ道鏡法王の心が淺間敷い。私は内閣で御神託のまゝ道鏡法王を彈劾し得られたので、百年の憂が去つたやうに、さばくした心地になつてゐる」

もう都には初秋の涼風が立つてゐるのであるが、庭には蟬が啼いてゐた。それを聞くと清鷹は宇佐神宮で聞いた蟬の聲を想出した。

「子供達は家にまだ歸つてゐないやうだが、何處へ往きました」

「三人共にそれぞれ學問勉強の御師匠様の許へ参りましてまだ歸りませぬ。聽てお正午には歸つて参りませう。」

「まだ、そんな時刻であつたのか。子供達にも苦勞を懸けるであらうと思ふと、可哀想でならな」

清鷹の顔には沈痛の色が顯はれてゐた。

「お父上が忠誠の一念をお立て通しなされる爲には、子供達も共に苦勞せねばならないので、私は長男の廣世と次男の眞綱には、それとなく申聞かして置きました。二人ともに能く承知して居ります。只季の仲世丈ははまだ幼う御座いますので、はつきりと吞込めないかとも思ひます」

「お姉上にも今頃はもう、内閣でありし次第がお耳に這入つてゐるやう。喜んでゐて下さることだらうと思ふ」

「喜んでお出でなされることとは存じますが、やはり法王様がどのやうな無理難題を貴方様に申懸けなさるかもしれないと、此家を心配してお出でになるとも存ぜられます。筑紫からお歸りになつた後、まだお遇ひにならないので御座りますから、お訪ねになつては如何でせう」

「お訪ねしたいのは山々だが、今日や明日にお伺ひしては、却て御迷惑にならう。その中に朝廷から何か御沙汰があらうし、御沙汰があつた後でなくては、近衛府への出仕も遠慮した方がいいと思ふ。大方二三日の中に御沙汰が下るに違無い。その上で姉上にお目にかゝつていろいろと御話しもしたいし、お願ひしたいこともある」

清鷹は妻に語つたやうに、晴々した顔になつてはゐるが、まだ少しくは心懸りがあるらしい容子が何處かに残つて見られた。

因幡員外介へ左遷

清鷹が朝廷からの御沙汰を待つてゐる間に、清鷹が竊らした御神託の内容は、何人が語りて云傳へるのであらう。朝臣の間で誰一人知らぬ者なき程に流布され、庶人の間に迄も傳つて語り草となし、道鏡法王の威光を夥しく損じたのであつた。しかしそれと同時に恐らく道鏡側で宣傳するのであらう。

「清鷹は偽りの御神託を得て來たので、その所爲は宇佐八幡宮を誹謗し奉るのと同じである」と、云ふやうな清鷹を誹謗した言葉が都の巷の間に流布され出して來た。

それを聴くと清鷹は安からぬ思ひもしたのであつたが、邪は正に勝てず、偽りは偽りとして、そんな逆宣傳は聽て日向ひなたに出た露のやうに霧散してしまふであらうと信じて、深く氣にも止めなかつた。然うしてそんな逆さまごとを觸れ歩く者こそ、神を誹謗し奉るもので、聽て神罰を蒙るであらうし、道鏡側が大周章に違てた悪あがきであるとも見做してゐた。

三日経た八月十九日、清鷹は朝廷から一向に御沙汰が下つて來ないので、待あぐむ心になつてゐた近衛府へ顔出して見ようかしらとも考へたが、やはり謹慎して家にゐると、中務省から下役人がやつて來て、中務省へ出仕あるやうにと傳へて來た。道鏡法王の憎しみの籠つた何かの命令が下ることは解つてゐるので、それが中務省から來るのは不思議のやうに考へながら、兎も角も出仕した。從五位下の者が通る房へ案内せられて待つてゐると、程もあらず粟田道鷹と大輔の藤原雄田鷹が顯はれて來て、禮を交し終ると、多くを語らずに道鷹の手から一通の辭令が渡された。それを讀むと、

因幡員外介を命ず。

とあつた。因幡員外介は近衛少監よりも貶下なのである。もつと酷い報復を法王はするであらうと思つてゐたのに、かく寛大な貶下で済んだのは、一重に 聖上の御慈悲に依てゞあらうと、心に感泣してお受けした。

「一ヶ月の間に任地へ下る準備を調へらるゝが可い。任地へ下りし上は、此上とも朝廷へ忠勤を勵むように心懸けねばならぬ」

道麿の聲には優しさが籠つてゐた。此場合にしても若し貶下の理由として、都の巷に流布されてゐる偽りの御神託を傳へたと云ふやうなことが述べられたなら、かまはず抗辯しようといふ構へになつてゐたが、然うしたことは觸れられなかつたので、清麿は何事も云はずに済まされた。

雄田麿とは暫時振りの對面であつた。雄田麿は役目として清麿に遇ふのであるが、強い同情と感謝してゐる思ひを、その眼に見せてゐた。然うして同族である故でもあらう。上役の粟田道麿の前をも憚らず、

「此辭令の次第、只々お氣毒に存じます。しかし心ある者は何人も一様に、清麿殿を伏拜む程有難く思つて居ります。私も先日の内閣殿上にて御神託御披露の際には末席にて拜承して居り

まして、貴方なればこそ、かゝる有難き御神託が得られたのであると、從來よりも一層、貴方に對する信頼と、尊敬の念を昂めました。皇室へは比類なき功名をお立てになつたのであつて、法王へは頂門の一針、聽て必ず貴方には、忠誠の報ひが来るものと信じて居ります」

然う云うのを半白の頭髮の道麿は、人や聞くと背後を振り回つたりして、おどく／＼してゐるので、

「お言葉汗顔の至りに堪へませぬ」

清麿は僅に云つて、永居をせず立上つて、中務省を退出した。

法均尼の忠誠

一

家に有つて今日の良人の出仕を待つてゐた嗣子は、良人が歸つて來て、因幡員外介の辭令を見せると、哀みの中に喜びの色を見せた。然うして翌日から家族一同で因幡國へ移つて往く準

備に取懸りだした。清鷹としては遠い任地へ赴くのに、家族を都へ残して置く譯にはゆかなかつたのである。姉の法均尼の許へ訪ねて往かうと思ひながら、法王に憎しみを受けてゐる自分なので、往けば必ず噂の種となり、法王が姉へ迄も憎悪を移して行くと考へられて、訪ねて行きかねた。いづれ因幡國へ往く時には、妻も子供達も引連れて別辭を述べに往かうとは考へてゐた。併し消息は常に通じ合つてゐて、因幡員外介に貶下されたことなど、眞先に報知したのであつた。のみならず宇佐八幡大神の示現の次第など、細々と書送つたのであつた。

八月はいつしか過ぎて九月となつた。都には秋風が吹いて、渡鳥が空を通り過ぎるのが茂くなり、樹間には百舌鳥のけたましい囀り聲が聞かれた。都の街衢は大御代を壽ぎ奉りて、平和を楽しむ態には變りはなかつたが、依然として宇佐八幡大神が道鏡法王を掃除す可しとの御神託が語り交されてゐて、何かしら不安な氣分が底に流れてゐた。然うして清鷹が御神託を偽り傳へたと云ふ道鏡法王側から出たと覺しき、神を冒瀆し奉る言葉も語り交はされてゐた。しかも道鏡法王の權勢は劣へた容子が見えないばかりか、愈々盛んになつて行くやうに思はれるのは、法王は清鷹が宇佐神宮へ往つてゐた間に、法王宮なる印を用ひ初めて、政府外に政府を造らうとしたのが、此頃殊にその印を使用するのが茂く、威勢を急に張り出したのである。清

鷹の御神託に依て受けた打撃を、かうした手段に依て糊塗しようとしてゐるらしくもあつた。

清鷹は因幡國へ赴任する準備に忙しくはあつたが、道鏡法王のかうした動きには、憤懣の思ひに堪へなかつた。人と生れた限り誰人にも多少は反省心があつて、御神託に對して何事も遠慮す可きであるのに、それが然うでない處に法王の不敵さ、無智、傲岸、不遜さがあるのであると視なければならなかつた。かうした傍若無人さを法王が持續するのであつたなら、畏き極みの御神託も踏躪られる恐れがあると思はざるを得ないと、憮然とせられたのである。それで今一度姉法均尼に依て、御神託を聖聞に達しようかと考へたのである。

九月も初旬は過ぎ、段々と都を離れて行く日が近附いて來るので、別辭を述べに往くとの世間體をつくつて、姉を法華寺に訪ねて行つた。姉法均尼にしても今日や來る、明日や來ると待設けてゐたらしく、清鷹が訪問して來たと、婢からの言葉を取次を経て耳に入れると、急ぎ清鷹の待つ自分の室へ下つて來た。姉弟はもう三ヶ月間近く逢はなかつたのである。

「姉上様には御變りもなくゐらせられて、お目出度う存じます。文にて申上げました通り、御伺ひ致しましては、何かと御迷惑だと存じ、今日迄御遠慮致して居りました。何かからお話し申上げていゝやらと、お話し申上げる事柄が多くて迷ひます。先づ以て私はお姉上の代りとして

宇佐八幡大神へ参向いたしましたもの、首尾よくも宇佐八幡大神の御心に叶ひ、御神の御聲を
ちか／＼に拜承し奉り得まして、使命を全うし得ましたのを悦んで居ります」

「御苦勞なことでした。道中の障害りはなかりしも、歸つて来た後に病んだと聞いて姉は案じ
て居りました。それも早やう治癒つて朝廷への上奏、内閣への披露と、無事に済み、其方は大
手柄を立てたのです。御神意はあゝなくてはならぬもの、法王様へは大きなお灸、それから後
の道鏡法王様の不機嫌なお容子は眼に見え、其方に連なる尼として、此頃はお言葉を下されぬ
ばかりか、尼を見るとお顔をお背けになりもします」

「然うであらうと察して居りました。自己の分に過ぎたる望みを起し、それが御神意に逆ひ、
道鏡悖逆無道にしてと宣言ひしは當然のこと、それであるのに、自己を顧みずに姉上に不興を
寄せ、私を因幡員外介に貶下するのは天を恐れぬ言語道斷の處置だと存じて居ります。姉上は
私が消息文で申上げましたやうに、法王は阿曾鷹殿の御神託と同じ御神託を得て来たならば、
太政大臣にしてやらうと仰せられた次第をお読み下されましたでしょうか」

「委細讀みました。天下の政治をまるで物の賣買でもするやうな、そんな汚らわしい約束を其
方にして迄も、高御位をお望みになる法王様のお心が恐ろしい。それであるのに其方が其方の

眞心を守護つて、御神託通りのまゝを上奏し奉り、法王の面前で内閣の方達一同、並にその他
の朝臣の方々に、怯めず憶せず披露した勇氣を、姉は感心して居ります。御先祖にしても幕場
の下からお賞になつてゐらるゝこととせう。因幡員外介に貶下されたのが何程のことであらう。
皇室に忠誠を期し奉る朝臣の方々は、其方に感謝もし、有難く思つてお出でなさるに違無い。
姉は法王様が其方へそれ丈けの罰でお忍びになつたのを、珍らしいことのやうに考へてゐます。
其方にも解つてゐやうが、一重に大御心の御仁慈を加へさせ給ふたのであつて、姉は有難く、
忝く感泣して居ります」

「はい、その事は能う解つて居ります。大御心の御仁慈を加へさせられ給ふたのでなくては、
どうして道鏡法王が之丈けの罰で済ませやうや、聖壽の萬歳を壽ぎ奉りて有難く感泣して居り
ます。然うした姉上のお心を伺ひまして私は安心致しましたが、姉上、近頃都の町々に畏くも
宇佐八幡大神が直か／＼に御聲を聞かせ給ひし御神託を、偽りとなし、私が策謀して作つた

ものであると、云ひ觸らし歩く者のあるのを、姉上はお耳に入れ遊ばしたでせうか」

「はい、聽いて居ります。何とも恐れ多い次第で、嘘と偽りは兎の毛程も能う云ひ得ぬ其方を誹謗し、誣しひるものであると、姉は嘆いて居ります。定めし其方が憤りもし、遺瀬のない思ひをしてゐるであらうと察して居りました」

「私の憤り、口惜しさは兎も角といたしまして、かゝる御神意を冒瀆し奉る流言は、自己を防禦まもがんとする道鏡法王の指圖か、それとも道鏡法王の部下の者達が、法王に媚びての仕業であるかとも存ぜられます。然うした處に御神託に屈しない法王側の心地の動きも見られますし、殊に此頃になつて急に弓削殿は弓削宮と稱せられるやうになりましたばかりか、法王宮の印をしきりに用ゐて命令を發し、政廳以外に政廳を立てんとして居ります。しかも何人も立つてそれを咎めんとする者はなく、藤原氏一族、吉備眞備殿すらも屏息してゐらるゝやうに見受けられて、慨嘆の至りに堪へません。かゝる際に只頼み參すは、宇佐八幡大神の無道の者は掃除す可しとの御神意のみで御座ります。」

姉上、之は私の杞憂に過ぎないかも知じませんが、萬一道鏡法王側で云ひ觸らして居ります御神託を非と爲し、偽りとなす流言が朝廷に達し、それが信ぜられるやうなものと相成りま

しては、遺憾至極でもあり、國家の一大事で御座ります。私は八幡大神に對し奉りて、責を果し得ぬ罪を受くるばかりか、力足らずして御神意を冒瀆し奉る次第ともなります。姉上に重き責を擔はすことに相成りまするが、聖上の御側近に御奉仕になるを幸ひとして、姉上から、御神託を今一應、内奏あられんことを希ひ上げます」

清鷹は忠誠の一念に顔を輝かして、姉に向つて平伏した。すると、法均尼はしばし考へてゐる態に見えたが、大きく點頭うなづき、

「其方の憂ひてゐる事柄には、一々道理があります。御側近に奉仕して居りましても、内奏を遂ぐるのは恐れ多く、國家の一大事でない限り慎まねばなりません。しかし其方の云ふ事は、誠に以て國家の一大事、姉は悦んで内奏し奉ります。若しそのことに依て重い御咎を受けましても、姉は厭ひませぬ。清鷹、姉弟相携へてかゝる折柄、國家へ御奉公の出来るのを悦びます。しかし其方とても此上の重いお罰が降つて來るかも知れないのを覺悟しなければなりません。道鏡法王はかくとお知りになれば、よもや其のまゝにしてはお置きにならないでせう」

法均尼にしても強い決意に眼を輝かしてゐた。

「それも覺悟して居ります。御先祖弟彦王の靈が身を殺しても、皇室に盡し奉れよとお命じに

なりません。姉上とてもその御心地でお有りになると存ぜられます」

「和氣の家に姉弟二人は生れ、其方に男の子三人あつてもまだ幼稚うてお役に立たず、男として御役に立つは其方一人、女と生れて來ても此私は御信任を賜つて、その日をお務めする身、何とて其方に劣つてよいものか、必ず其方の願ひを引受けて、屹度其方の志の遂げられるやうに圖らひませう。安心してゐるがいゝ」

「有難う存じます。それでは私は之でお暇いたします。若し無事であれば、因幡國へ立越す以前に、妻子を引連れてお別れに今一度お目にかゝりに參上致します」

慇懃に禮を行つて歸つて行くのを、見送る法均尼の眼には涙があつた。

流竄の刑

姉法均尼とお互の忠誠を盟合つた後四日程で、清麿は不安の中にも因幡國へ赴任して往く準備を調へ終つたのであるが、若しかすれば今日邊り姉の方から何か消息が通じられて來るので

はないかしらと思つたりしてゐる晝過ぎ、不意に刑務省の役人が、四人連立つて姿を見せて來た。その中の頭だつたのは、大伴戸部麿と云つて刑務省でも重要な地位にあつて、清麿とも知合つてゐた。此方で案内もせぬのにいきなりどや／＼と奥の房迄侵入して來て、清麿が其處に座してゐるのを眼にすると、威儀を正した戸部麿が朝廷の命を傳へた。

「藤野和氣清麿、朝廷から其方を大隅國に流竄に處す御命令が下りました。直ぐ刑務省迄お越しあれ」

「はあ、そのやうなお命令が下りましたか。しかし從來より位並に勲位ある者の流竄の刑に處せらるゝ際には、刑務省などへ罷り越さず、自宅から流竄地へ罷り越すやうになつて居りまするのに、何うしたもので御座りませう」

清麿は取亂した容子を見せず静に聞回へした。

「今朝其方が宇佐八幡大神より齎しまゐりし御神託は、偽りの僻事であるとの御詔勅が天下に公布され、藤野和氣清麿は官位、勲章とも召上げられ、以後は姓を別部、名は穢麿と改めるやうにお命令が下つたのである。其方ばかりではない。其方の姉の法均尼にしても、其方と謀つて偽り言を上奏し奉りし罪に依り、官位官名並に尼の名共に召上げられ、以後は以前の名の廣

蟲賣に降し給ふて、備後國に流竄せらるゝこと、相成つた。最早其方は朝廷の人でなくて、罪を得し穢鷹、一應刑務省へ迎へて、猶も何事かお達しがあるのであらう」

戸部鷹は威かめしく述べたが、何處かに氣毒に思ふ情け心の程が窺はれるのであつた。

「私ばかりか、姉上迄も備後國に流竄とはお氣毒な」

清鷹は感慨深さうに云つたが、戸部鷹が述べた言葉を次室で聞いてゐたらしい妻の嗣子は、顔を蒼白に、おろ／＼した容子で其處へ姿を見せて來た。子供達三人も母の背後に従つてゐた。

「大隅國へ流竄に」

嗣子は後の言葉を續き得ず、衣の袖で顔を蔽うた。

「嗣子、周章てまい、心を落附けたがいゝ。因幡員外介へ貶下丈けでは済むまいとは思つてゐた。勢ひ盛んなれば鬼神も之を避くと世の諺にもある。嘆くまいぞ、其方も朝廷へ忠誠の一念を立て通さんとする和氣清鷹の妻ではないか」

嗣子が泣いてゐるのを叱つた。

「戸部鷹殿、直ぐ御同行致しますが、刑務省へまゐれば、其處から流竄の地へ送らるゝのは解

つて居ります。お情けに子供達に別れを告げまする間、暫時お待ち下さるやう願上ます」

刑務所の役人の中には膨面をする者もあつたが、戸部鷹は快く頷いて、

「緩然りと、心措きなう、お内室やお子達と別れを告げめされい。我等此處にあつてはお氣詰りでもあらう、次の房に扣へて居りますれば、済みましたなら、お呼び下されい」

戸部鷹が退いて行くのに従つて他の役人三人も次室へ姿を消して了つた。

「嗣子、其方の良人は世に恥ぢ、人に恥ぢる行爲をしたのではない。朝廷へ忠義を盡し奉らんとするのを、時の権力者が遮つた上、憎んで罪に處すのである。清鷹の心は宇佐八幡の大神並に東大寺の盧舍那佛が見透してゐらせらるゝ。何をか恐れ、何をか憚ることやある。唯時の非なるを嘆くのみである。重ねて遇ふ日もあらう。其方には里方の保護もある筈、その身を大切に於て此家を守護り、子供達をいぢけささないやう、養育を頼みまする」

「はい、かしこまりました。平生のお教へを忘れ、不覺の涙を見せましたのをお詫びいたします。屹度お仰せ守り、此家に在つて、子供達の教育、養育と仕果しますで御座りませう」

「うむ、それ聞いて清鷹は心安う大隅國へ行かれます。これ廣世、先程からの容子、其方も最早十三歳になつて居るのであるから、今父が母に申したことは能く判つたであらう。母を守護

り、母を大切に、父がゐすとも、後日立派に朝廷の御役に立つ人となるやう、學問勉強に勵むが可い」

「はい、御父上、廣世は悲しう御座ります。しかし父上や母上からいつもお教へを受けて居りますので、今日のことも臆氣ながら解つて居ります。よしやお父上は大隅國へ流竄ながしものの刑をお受けになりましたも、それは悪いことをなされたのでないのを、能く承知して居ります。お父上がお家にお出でにならずとも、廣世は屹度後日朝廷の御役に立つやうに學問を勵み、母様を守護つて日を過すやうに致します」

十三歳の廣世は父の前に手をつかへて、涙の眼をこすりながら述べた。

「うむ、それで可い。眞綱、其方は何うぢやな」

「私も兄上と同様、母様を守護りて、お教へを能く聞き、お父上がお出でにならずとも、一生懸命に學問を勵み、お父上が今仰せられましたやうに、重ねてお目にかゝる日迄に、立派な人間になつてゐたいと存じます」

眞綱もやはり泣きじやくりしながら答へるのであつた。

「うむ、眞綱もそれで可い、然うして仲世、其方は何うぢや、其方は父が流竄ながしもの者になると云ふ

ことが解るか」

「よう解つて居ります。私は道鏡法王様がお父上をそんな目に遇はすのだと思ふと、法王様が憎う御座ります。どうでもお父上は大隅國へ流竄ながしもの者になりにお越しになるのでしたなら、私はお父上の留守中、母様の仰有ることを能く聞いて、強請ねだりことなどもせず、能く御本を勉強いたします。然うして兄上達とも争ひごとをせず仲善ういたします」

「仲世の心懸けも立派である。嗣子、子供達は皆それ／＼健氣な考へを持つてゐてくれる。之で其方も安心が出来るであらう。くれ／＼も私がゐすとも子供を立派に育て／＼くれい。それが其方への頼みである。奢る者久しからず、聽ては善い便りの日も来るであらうと其方は思はぬか。それを樂みにして日を遇せ。宇佐八幡大神の御守護が間違ひなく此家にあるのを、心に銘記して、朝夕拜禮するのを忘れまいぞ」

「はい、心得まして御座ります」

「只おいたはしいのはお姉上、お身體も弱くゐらせられ、備後國に御配流になつた後が氣遣ひである。今一度御目にかゝりたいと思ふが、大方それは許されないのであらう。嗣子私が刑務省へ參つた後、兎も角も姉上様の方へまゐつて御容子を見るがいい」

「は」

嗣子は涙を見せるのを悪いと思ふらしく、齒を喰ひしぼるやうにしてゐたが、それでも涙で一杯顔を濡らし、悲哀^{かなしみ}みで身體を顫はしてゐた。

「それから今一つ其方達に守つて貰はなくてはならないことがある。流謫の刑に處せられると、刑を受けた者が都を離れる際には、その家族の者達が、名残りを惜んで街道筋をいつ迄も後を追うて行くのを、今迄に屢々私は見た。見苦しい極みである。子供達に父の然うした悲惨^{みじか}な姿を見せるのは、子供達の後々の爲にも善いことではない。然う云ふことをせぬやうに。別離^{わか}は今、我が顔を見て置きたいのなら、嗣子も廣世も、眞綱も仲世も、側へ寄つて来て、能う私の顔を見るが可い」

「はい、我が良人様」

嗣子は一と膝前へ進んで、涙の眼で良人の顔を熟視するやうだつたが、其儘其處へ聲を上げて泣伏して了つた。小兒達三人も父の側近う寄つて、泣きじやくりしながら、父の顔を見上げるのに、清鷹は一々手をやつて、頭を撫でゝやつた。流石に清鷹にしても恩愛の情に曳かれて涙を滂沱として頬に傳はしてゐたが、不圖氣が附くと、聲を低めて、

「嗣子、見苦しいぞ」

厳しく叱つた。それで漸く嗣子が身體を立て直すと、

「子供達も泣き止むがいゝ。父も涙を拭いた。御役人の方々が待つてゐらるゝ、もう行かねばならぬ」

強く云切ると、季の仲世が膝に手を置いてゐるのを拂退けて立上り、

「戸部鷹殿、いざ御同行仕りませう」

次室に控へてゐる大伴戸部鷹初め、他の三人の刑務省の役人に聞えるやう聲高らかに呼懸けた。

膽駒山麓の狼籍

一

神護景雲三年十月二十五日の寧樂の都は今漸く明け初めたばかりである。東の方の空には茜

色の雲が漂ひ、御座所のある法華寺の邊から、宮闕内の建物は、朝靄が深う立ちこめて、まだ夜の色が残つてゐるやうに見られ、鬱然とした立樹の間からは鳥が翔り出してゐた。東大寺の朝看經の鐘の音が殷々と響き渡り、寺々へ朝參詣りする早起きの者達のみが僅に、露に霑うた道を歩いてゐる頃、刑務省の裏門から、賤人に擔がした一挺の汚ならしい輿が擔ぎ出された。輿の前後左右には四人の警固の兵士と、外に刑務省の下役人が二人附添ひ、如何にも重刑者が輿の中にゐるのが、一目で察せられた。

輿は都大路へ出ると、眞直ぐに、難波津への街道を目指して進んだ。通行人が少いので、それを見ようとして奔き合ふやうな騒ぎは起らなかつたが、それでもその稀な通行人は立佇つて、何か考へるやうな眼付きをして見送り、念珠を手にしてゐる者は念珠を揉んで見送るのであつた。その汚たならしい輿の中には、和氣清麿改め穢麿が載せられてゐるのであるとは、誰も推量してゐるのであつた。

輿が都の出口邊り迄來た時に、陽が映して來た。輿の上の清麿は別段縛られてはゐなかつた。それで輿の前面に垂れ下つてゐる汚れた布を、手を延ばして少し片寄せ、隙間から別れて行く都を、今一度見ようとするやうに覗いた。直ぐ道の片側に停止つて自分の乗つてゐる輿を見送

つてゐる二十人ばかりの人群が見られた。清麿はあれ丈け云残して來たが、その中に鬮子や子供達が交つてゐるのではないかと、胸をひやりとさしたが、然うでなく、皆見知らぬ人の顔のみであつたのを悦んだ。しかし路真人豊永の顔も見られず、雄田麿の代理者らしい人、吉備眞備の代理者らしい人の姿も眼に入らないのが、少しは寂しい氣がしないでもなかつた。然うして自分が穢麿と名の變つた重罪人であるのが、深く自覺せられた。九十日程以前此街道を御勅使として晴やかに、通行人の何人からも仰がれて、輿にしても御勅使の輿に乗つて進んだことが偲ばれ、變轉極りない人の身の運命に就いて考へられもした。

街道は田園の間を過ぎ、秋の露霜に葉を染めた樹を點綴してゐる林の間を過ぎ、小丘を抜けて、白く南に走つてゐるのである。清麿は輿の上で、輿夫や兵士が雑談を交はしてゐるのを耳にして、つれづれを紛らはしてゐたが、ともすれば又しても思ふても甲斐なき姉に就て考へられたり、家族の事などへと思ひは向ふのであつた。すると直ぐ氣がついて、宇佐八幡大神を念じ奉る心に變へて、只管祈念し奉るのであつた。

圖ある宿場に着くと中休憩を取つたのであるが、朝が早かつたので擔夫達は腹をへらし、中食と云ふやうなことになつて、役人も兵士も輿夫達も食事を取り、清麿にも食事を勧めたが、

清鷹は昨日からの身の變動で食慾がなく、箸を取らなかつた。然うして奥は再び上げられたが、膽駒山近くなると、西の空から黒雲が出て来て見る／＼今朝からの上天氣が變つて来た。

役人も兵士も奥夫達にしても、一と雨やつて来て、濡れるのではなからうかと、一層足を疾め出してゐると、不意に側の樹立の中から八九人、面を包んだ館の家來らしい者が立顯はれ、行手を塞いだその手には、孰れも共に劍を抜いて提げてゐた。護衛の兵士はそれと見ると、同じく劍を抜いて、防禦がうとするらしかつたが、面を包んだ曲者の一人が、役人の一人に何か耳打ちすると、その役人は手を上げて兵士達の劍を抜かうとするのを制したばかりか、今一人の役人を誘つて片側の樹立の間に退き、兵士達にも同じく樹立の間へ退くやうに命するのであつた。

清鷹は奥の上にあつて、垂れ布の隙間から此有様を眼にすると、身に危険の迫つて来たのを知つた。劍を掲げた曲者の一人が、劍を翳して奥を目懸けて突進して来た間髪を入れずに、垂れ布を掲げて清鷹は準の如く奥から大地へ飛び降りた。奥夫達が忙然として動かなかつたのが幸福なのであつた。然うして清鷹は側の樹立の中へ駆入つたが、足許に手頃な樹の枝が落ちてゐるのを眼にすると、拾ひ上げて手にした。

それと見ると覆面の曲者達は、どつとばかり清鷹の方へ迫つて来て、その中の一人は清鷹の身近に迫つて来て劍を振上げたのを、近衛將監の役を務め、抑勝の亂にも軍功のあつた手練の清鷹は、逸早く自分の方から進んで、手にした樹の枝で發止とその面を打ち、續いて劍を手にする腕をしたゝか打つたので、其の曲者は劍を下に落して了つた。その劍を清鷹が拾上げた時に、次の曲者が迫つて来たが、清鷹が劍を振上げて斬らうとしたので、愕いて退くと、後に續く曲者達も動揺して、容易に打ちかゝらうとはせず、遠巻きに取圍み、其處此處に聲を擧げて威嚇し、清鷹が氣勞れするのを待つて一齊に進んで打取らうとする氣勢が察せられた。

清鷹として見れば自分の手に劍のある以上、此の人数位は斬捨て得らるゝやうに思へはしたが、一罪人となつて流竄の地に向ふ道すがら、それは穩かならない舉動だと考へられた。のみならずこれらの曲者は、何れ自分へと憎惡心を燃してゐる道鏡法王の手先きの者に違ひ無いのであるから、此の上の報復を抵抗の術のない流竄地へ往つた後に受けるのは、身を滅亡す基だと思惟せられて、曲者を殺害めずに、都合よく此場を遁れて、難波津へ行く方法が胸の中で考へられた。と、物凄まじい風が吹出して来て、林の樹々の木葉を鳴らすよと見ると、大粒の雨が従つて来たと同時に、ピカリ電光が閃いて、烈しい雷が鳴り出して来た。曲者達は依然として

遠捲きに巻いて進んで來なかつた。

此雷りが何かしら天祐であるかのやうな氣がして、自分が此場を通れ去るのを救助してくれ
るのではないかと清鷹には思はれた。果して雷鳴は次第に近うなつて來て、雨は繁くなり増り、
雷の一つは火柱を天地に立てるやうな電光と共に、近くへ落ちて、耳を撃く轟音は地軸も裂け
るばかりであつた。續く雷も近くへ落ちて、雷は恰も清鷹や曲者のゐる樹立を取圍んで責立て
るやうに、その次のは曲者達が三四人かたまつてゐる場所の大樹へ落ちて電火を散らし、樹は
裂けて曲者の一人は、裂けた樹にうたれたらしく見られた。四邊は夜のやうに晦冥となつて、
最早覆面の曲者達は清鷹の所在を忘れて只管雷に驚き恐れ、大地に耳を押へて伏す者もあり、
樹立の間から通れて街道の方へ走り去つた者もあつた。然うした中で天祐であると信ずる清鷹
は悠然として、樹立の奥へ身を隠すのを一人として追ふ者はなかつた。

その中に雷は次第に遠退いて行き、雨も小止みとなつたが、清鷹は樹立の奥二町程ばかりも
進んで來てゐて、さて難波津は何れの方向に當るやらと、林の中に迷ひ込んだ思ひがして、大
きな樹の洞穴が眼の前にあるのに氣が附くと、其處へ這入つて雨を凌いだ。すると今通れて來
た方に當つて、

「藤野和氣清鷹殿、藤野和氣清鷹殿」

と、繰回して呼ぶ聲がするばかりか、

「近衛少將佐伯楯守勅使としてまゐり申した、藤野和氣清鷹殿」

と、穢鷹である自分を、以前の名で呼立てるのは、確に聞覚えのある聲で、今度の事の起り
の發端である阿曾鷹の御神託を、最初に清鷹に報知してくれた其人であると知られた。自分の
上長官であつた人が、わざわざ勅使としてやつて來られたのは何事であらうと、先づその人を
信用し、親しみを覺えた。

「此處に居ります。只今それへまゐります」

清鷹は大聲を上げて應へた。然うして洞穴を出て聲のする方へと歩いた。

ものゝ二十丈程も歩まぬ先に、樹立の間を縫うて此方へ進んで來る佐伯楯守と、自分と同僚
であつた近衛將監日下部立鷹との姿を清鷹はみとめた。彼方でも其れと見ると、佐伯楯守は親
しい笑顔になつて、清鷹の方に向つて手を舉げて近づいて來た。

佐伯楯守や日下部立鷹と清鷹が近々と顔を見合はすやうになると、先づ清鷹の方から禮を行つた。楯守と立鷹とはそれに應へてから。

「清鷹殿御無事であつたか、我等二人勅命を奉じて馬を飛ばし、急いで参つたのであるが、今須臾遅れたならば、勅命も空しく、我等も役目を果し得ず、大事となり申した。貴殿に危害を加へんとした者達は、勅命を語り聞せて、早や退散致させました」

楯守はホツとした様子になつて、清鷹の無事であつたのを祝福した。

「朝廷に於かせられては、道鏡法王が貴殿に危害を加へんと、私兵を派遣せしとお聞込みに相成り、それ差止めいと畏くも御勅命が下りましたので御座ります。御勅命を奉じてかく我等兩人急ぎ駆けつけましたが、只今の雨と雷で少し遅れましたのに、先は御無事で、我等の役目も滞りなく相済み、お互に目出度う存じます」

近衛將監日下部立鷹も清鷹の無事を祝福した。

「穢鷹と名も改められて、大隅國に流刑に處せられし私如き者に、危害を受くるのを救へとの御勅命、聖恩の忝なさ、有難さに此穢鷹、唯々うれし涙にくるゝばかりで御座ります。此處よりお禮を言上し奉ります」

清鷹は眼に涙を浮べながら然う述べると、雨で大地が濡れてゐるのも厭はず、自身の服が雨に濡ひきつてゐるのをも意に介せず、其儘大地に座し、寧樂の御座所の方に向つて三拜し、

「穢鷹此處より聖恩の忝さに御禮申上げ奉ります。才足らず、意至らずしてお咎めを受け、之より配所へ罷越しまするが、都には忠誠の朝臣數々居給ふを頼みとして、意を安うして居ります。謹んで聖壽の萬々歳をことほぎ奉ります」

と、猶も三拜して身を起した。それを見た楯守の眼にも涙が光つた。

「あゝ、忠誠貴殿の如き方が、かゝる有様にならるゝとは」

云はじとしながら自然に楯守の口から出た言葉であつた。

「此處には誰人も聞く者が無い故に申します。清鷹殿、一二年大隅國で御辛抱なされませい。悪は榮えるものではありません。その中には屹度都へ御還りになる日が参ると存じます」

立鷹にしても眼に涙を見せて、清鷹を勵まし慰むるのであつた。

「楯守殿、立鷹殿お二人のお優しきお言葉、身に浸みて此穢塵厚く御禮申し上げ奉ります」
清鷹は二人に禮を述べた。然うして三人は連立つて樹立の間を縫つて林の外に出たのであつたが、護送の役人も兵士達も輿夫達も、雨に濡れた姿で以前の場所に居並んで、清鷹の現はれて来るのを待つてゐた。

「それでは佐伯楯守殿、日下部立鷹殿、之でお別れいたします。有難う御座りました。厚くお禮申上げます」

清鷹は輿の側に近づき、乗るばかりになると、重ねて勅使と副勅使へ禮言葉を述べ、町重な禮を行ひ終ると輿上の人となつた。

「さらばで御座る清鷹殿、お身體を大切に、朝廷の御赦免が、近くあるやう祈り居ります」
楯守の別れの言葉であつた。

「我等同僚とも相談致して、都にお残りある家族の方々に、心遣ひ致さうと存じます。御身體を大切に、さらばで御座ります」

立鷹は同僚として親切な言葉を聴かしてくれた。二人の温情に清鷹は更に頭を下けたが、輿は動き出して、雨に泥濘んだ街道を臈駒山の方へ進んで行くのであつた。

清鷹を乗せた輿が難波津へ着いたのは、かうした障碍の爲に遅れて、夜も更けた頃であつた。官設の囚人宿に入つて、その夜を過し、翌朝になると、船出を司る役人がやつて来て清鷹に應接したが、以前の宇佐八幡大神へ勅使として参向した節の顔馴染であつて、何事に依らず町重であり、親切であつた。その船役人に導かれて清鷹は流謫地へ往く船に乗つたのであるが、船出間際になつてその役人は密に書状二道清鷹に手渡した。清鷹は人目に立たぬやうにしてその書状を披開き讀んだが、一通は吉備眞備右大臣からで、今一通は藤原の雄田鷹からであつた。右大臣の書状には一二年の間には赦免あるやう盡力しようから自重せよと、短文であつた。雄田鷹の方は、流謫地へ往つた後の貴殿の生活に事缺かぬやう、二十戸の封を割いて贈るからと、之も短く書かれてあつた。清鷹は右大臣の温情と雄田鷹の友情に泣かるゝ思ひがした。かくして清鷹を乗せた船は、折柄の船出には都合のいゝ風に帆を上げて、陸地を離れ、大隅國を目指して沖へ出て往つたのである。

清鷹が大隅國の配所へ赴いて間もなく、道鏡は没落し、清鷹は許宥されて都へ還つて來たので、その配所生活は、僅か一年一ヶ月に過ぎなかつた。歸來後朝廷に數々の功勞を立て、天壽を全うし、逝去すると、護王神社として祭祀られ、その忠誠の一念は、今も生きて國家を守

護してゐるのである。

（完）

和氣清麿

昭和拾六年十二月廿五日印刷
昭和拾六年十二月三十日發行



滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の
外地 定價 壹圓九拾八錢

◎定價 壹圓八拾錢
郵送料拾四錢

著者 生田 葵 アキヒ

發行者 田中 秀吉 ヒロキ

印刷者 井下 精一郎 セイイチロウ

發行所 全國書房

大阪市南區西關町拾九番地
會員登錄番號二一四一〇一

電話大阪東

五五一一九
三〇六二九
三〇六二九

東京 下谷 六〇八
振替大阪 六四八二四

配給元 日本出版配給株式會社

最新刊

大阪高等學校教授

市村其三郎著

一七〇 甲二四

仁徳天皇

株式會社三和銀行副頭取

岡野清豪著

二〇〇 甲二四

金・物・心

松波治郎著

一八〇 甲二四

小梅田雲濱(上卷)

池田小菊著

一八〇 甲二四

來年の春

近刊豫告

佐藤一雄著

詩集 日本列島

吉川英治著

小日本名婦傳

松波治郎著

小梅田雲濱(下卷)

佐藤一雄著

詩集 日本名婦傳

女流作家叢書 1

池田小菊著

來年の春

定價 壹圓八拾錢
送料 十四錢

日本の單行本の讀者層の大部分を女性が占むると云ふ事である。
處が讀める本、乃至は讀まねばならない本がどれだけ出版されてゐるか云ふこと、又讀む人々がどう云ふ風に消化してゐるか云ふこと、一國の文化の上にこの傾向と意味が如何に重大なるかは今更云ふ迄もない。私は出版界に於ては、素人であるが、この間の事情をじつと見詰めて本叢書を思ひ付いたのであつた。
幸ひ執筆者に於ても私の出版に對する情熱を理解され、後援されて、現女流文壇に於て最もしつかりとした足並を持つて居られる人々の御参加を得た事は讀者と共に喜びたいと思ふのである。故に日本に於て最初に世に出た女流作品叢書の企圖と文化的効果を祈つてやまない。

田中秀吉しるす

續刊

壺井 榮

中里 恒子

窪川 稻子

眞杉 靜枝

森田 たま

(いろは順)

第二回配本

綱野菊著

若き日

吉川英治著

日本名婦傳

宮本武藏にしても亦太閤記にしても單に愛讀するのみならず化學的に分析して之を實生活の上に應用せんと心掛ける點に於て私は決して人後におちないものと思じてゐる——同時に一冊の書が現代人の生活に實に強い影響を與へる事を驚くものである、故に吉川先生に直接お目にかゝり日本の代表的な女性を世に贈つて貰ふ事となつた、八編よりなるも皆手頃の量を持つてゐる事等うれしいものゝ一つである。

廣く讀者が讀まれ、この優れた女性達を通して吾等は如何に生くべきかと云ふ點を考へたいと思ふのである。

内

大楠公夫人

太閤夫人

山陽の母

谷干城の妻

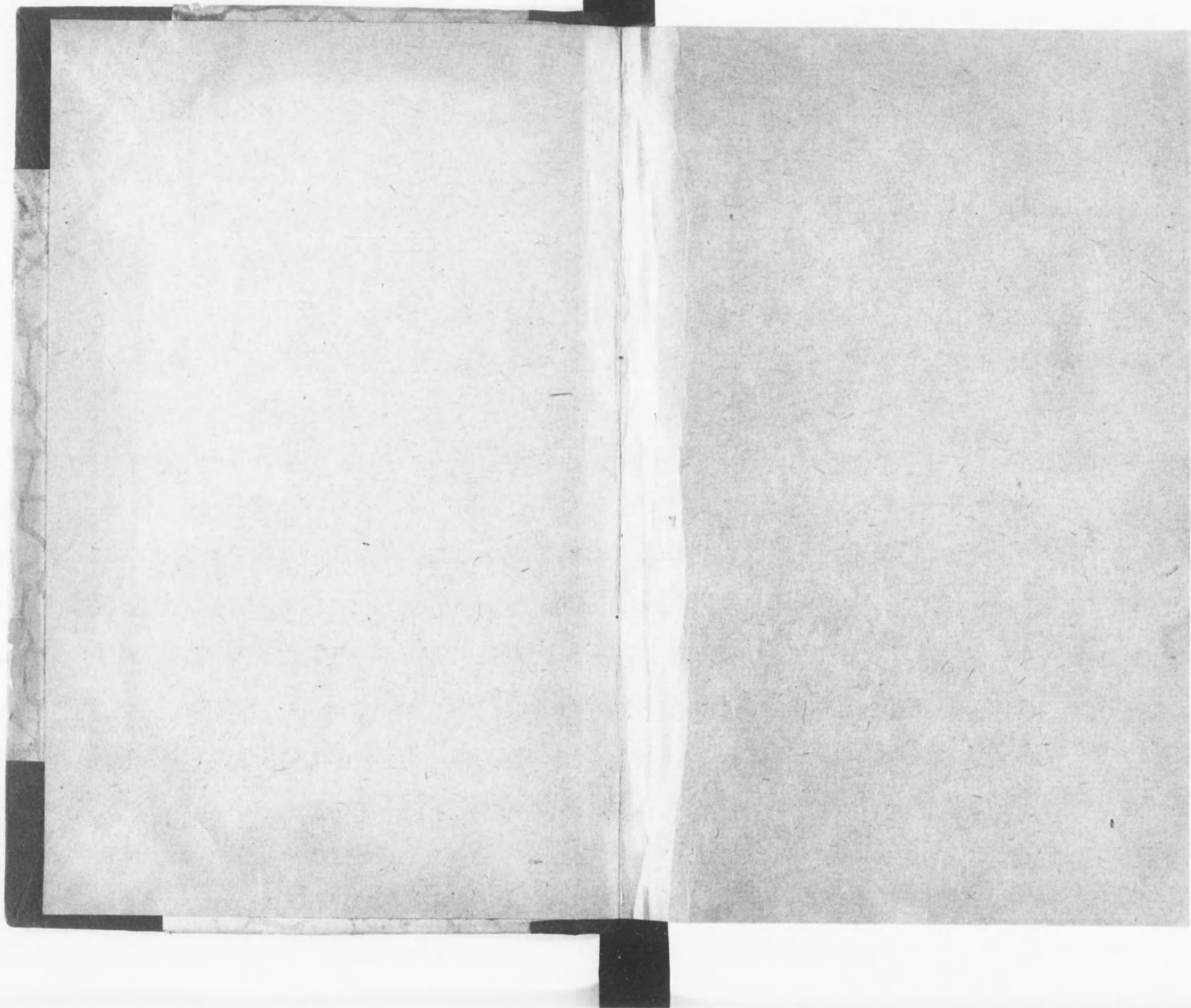
小野寺十内の妻

細川ガラシャ夫人

靜御前

古代日本に咲いた華々

容



終

